355
1

355
1

時事叢書
第十四編

戰爭と講和の歴史

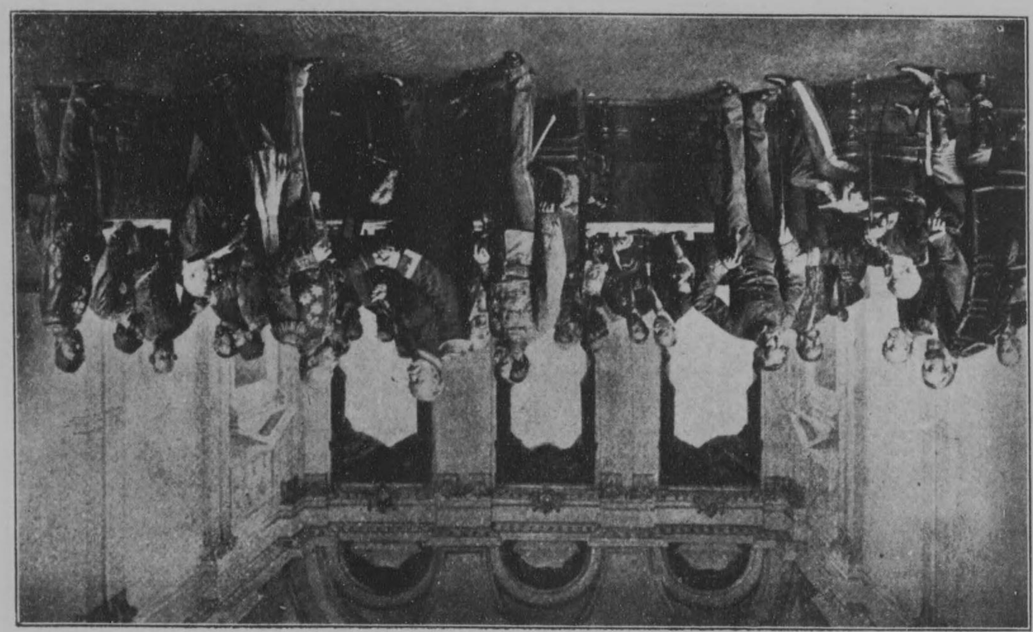
文學士　時野谷常三郎　著

戰爭と講和の歷史

文學士　時野谷常三郎著

東京
冨山房發行

大正
3. 12. 11
內交



會 談 の シ リ ル ス

（フロヴコシ使大國露右・ヴルマスヒ左で向はるせ手握）

小序

戰爭は慘虐である、非文明である。將來の世界に於ては之を一掃する樣にせねばならぬとは、平和論者の希望である。さり乍ら優勝劣敗の競爭が國民間に存する以上、戰爭の全廢は言ふ可くして容易に行ひ難い。畢竟一の夢想たるに過ぎぬのである。根本的死活の問題に觸るるに當つては、如何なる國民も猛然干戈を執るの覺悟が無ければならぬ。併し文明國間に於ける戰爭は、常に或る目的を遂げ樣とする政治上の一手段である以上、戰爭の勝を得る樣心懸くると同時に、所謂講和の外交に勝を得る事を努めねばならぬ。慘憺たる暴風の一過せる後には、直ぐと靄々たる光風を掬する事が出來る。併し殺伐な戰爭の後には、樽俎折衝の難關がある。洋々たる平和の喜びは俄に來るを得ぬのである。東西文明の輸贏を決

した彼の波斯戰役から、今に至る二千四百有餘年、其の間慘毒を流せる戰の行はれたのも少なく無い。講和の際にも幾多の波瀾曲折がある。戰爭と講和の歴史を繹ねて、今日に處するも強ち無益の事では無い。今や有史以來、未曾有の戰雲は全歐の天に漲り、其の餘波は亦た東洋にも及びつつあり。古來の歴史を見て、將來を推すも焦眉の急ではあるまいか。『戰爭と講和の歴史』が此の目的の一助たるを得ば、著者の本懷は之に過ぎぬ。記事の粗漏は大方諸君子の叱正を仰ぐ事にする。

大正三年十一月十五日

著者識

戰爭と講和の歴史　目次

一　戰爭と講和の性質……一
二　上古より近古に至る戰爭と講和……一〇
三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和……三九
四　クリミヤ戰役と其の講和……五八
五　伊太利統一戰役と其の講和……六六
六　普墺戰役と其の講和……七七
七　獨佛戰役と其の講和……八五

目次

八　露土戰役と其の講和……九七
九　日清日露兩戰役と其の講和……一二六
一〇　バルカン戰役と其の講和……一三三

目次終

戰爭と講和の歷史

文學士　時野谷常三郎著

一　戰爭と講和の性質

抑も人生は優勝劣敗の競爭場裡である。若し此の競爭が絶對的に止み得るものとせば、國民の間には進步が無い、發達が無い。人生は畢竟死灰枯木の無意義な生活に終るであらう。されば人生に於ける競爭は止み得べきものでも無く、又止むる必要も無いのである。優勝劣敗の競爭が國民間にある以上、戰爭は必然避く可らざるものである。戰爭の絶滅の如きは、畢竟平和論者の一理想たるに過ぎぬ

のである。

さて此の戰爭なるものは國際間に於ける場合、常に或る目的を遂げ樣とする政治上の一手段である。或は彼のクラウゼウィッ將軍の言へる如く、戰爭は或る種の手段を用ゐた政治上の繼續動作である。そして今戰爭の起り得る場合を考ふるに主として精神上の問題から起る場合と、經濟上の衝突から起る場合と二つある。そして兩者何れも政治(政略)に關係あるは無論である。前者は主に宗教的、感情的の動機から輸贏を決する場合を言ふのであるし、後者は重に商工業の競爭、植民計畫の衝突等、所謂經濟利害の問題から起るのである。例へば彼の十字軍の起因の樣に主なる原因は宗教的である。又バルカンでの大スラヴ主義と大ゲルマン主義との爭ひの如きは、人種、言語、歴史等の中、比較的多くの要素で連合した一團の民族が、同樣な他の一團の民族に對する爭ひで、畢竟感情的の衝突にも因す

(『爭戰』　ヴィクトル・ユーゴー)

一　戰爭と講和の性質

るのである。又ポエニ戰役の如きは、羅馬、カルタゴ兩國民の死活戰なれど、戰の主因は經濟的で、七年戰役中英佛の植民戰の如きも、經濟上、植民計畫の衝突から起つて居る。併し同一戰爭であつて精神的方面と經濟的方面の兩因を兼ねたものあるは無論である。前に言うた十字軍の如きも強ち精神方面の衝突からのみ起つたので無く、經濟的の關係も少く無い。バルカンでの二大主義の爭ひも、感情の衝突からのみ起つたので無く、宗教、經濟に關係あるは勿論である。

次に戰爭の一般の性質は、紛爭の起つた政治上の關係から決定さる可きものであつて、政治は常に戰爭の實行に至大の關係を及ぼすのである。言ひ換ふれば、政治上の爭點(精神上經濟上)となつた利害の大小及び其の性質は、兵力の使用及び戰鬪の程度にも大なる影響を及ぼすのである。彼のポエニ戰爭で戰の主因となつたのは、地中海に於ける占有權(主として經濟的)の爭奪で、羅馬、カルタゴ

二大勢力の存亡に關する死活の戰である。從つて戰亂は久しきに渉り、凡ゆる慘毒を恣にし、遂に悲慘なカルタゴの殲滅に終つたのである。彼の日露間の戰の如きも、二國は敢て他の一方を全然征服しようとしたので無いが、當時の日本に取つては自國の存亡を賭する戰である。日本の政治上の將來、又は國民的、國家的將來は、一に其の戰爭の結果如何に關係したのである。從つて全國民は此の壯烈な戰につき熱心なる同情を發し、擧國一致如何なる犧牲をも辭せぬ覺悟であつた。之に反し露國は單に一小部分の目的の爲に爭ふたのであつて、東洋に於て優先權を占め不凍港を得、東方海洋上に自由に出入しようとしたのである。從つて此の戰は露國に取つては、國民戰爭の性質を顯はさぬ。彼の陸軍部内に於てすら、政府の方針に反對する者を出した位で、是等反對者は内政上の或る目的の爲に此の戰を利用し、遂に革命を促さんとした位である。併し露は大國

一　戰爭と講和の性質

であるから、其の全力を盡したので無いにせよ、其の準備は實に大規模のものである。日本も前に言ふ通り擧國一致の死活戰であるから、殆ど其の全力を擧げ、稀有の一大活劇を呈するに至つたのである。兎に角戰は兩大勢力が死活戰を以て其の運命を極める時程、悲慘なるは無く、大規模なるは無いと言うて宜しい。——併し時代が後れ、凡ゆる大戰の要素が備はれる時程、大規模になるのは言ふまでも無い——戰の主眼たる政治上の目的が、一小部分であればある程、戰は決して大規模なるを得ぬのである。

さて古今に渉り、凡ての種類の戰爭を通じ、所謂大戰と稱すべきものを見るに、概してナポレオン戰役前にありては、始終打續ける戰が無かつたにせよ、兎に角同一目的の戰爭の期間は永きに過ぎ、ナポレオン役後に於ては、概ね此の期間は左迄永からぬのである。例へば前者に於ては百年戰役あり、三十年戰役あり、後

者にありてはクリミヤ戰役、普墺戰役、獨佛戰役の如き、多くは三年以下が普通である。畢竟上古から近古迄の間では、戰爭の種類の如何に依らず、程度の大小に係はらず、海陸交通の不便なりし結果、戰鬪材料（兵員、兵器、糧食、輸送機關）を直ぐ一局部に集中して戰を一時に決する事が出來ず、一般に戰は永引く傾向を持つて居た。更に古代の通信機關、財政用兵術兵器に至つても、速に決戰的會戰を行ふ樣に出來て居ぬ。是又戰の永引く所以である。更に經濟上の關係でも、古代にありては現今の如く一時に多くの兵員を動し、幾多の材料を犧牲として干戈を交ふるもので無く、戰爭と經濟との關係が比較的密接で無いから、勢ひ戰が久しきに渉るのである。そして兩軍の勢力が伯仲する場合、愈々此傾向が著しくなるのである。近代の戰爭は之と反對に、海陸交通が便利な結果、戰鬪材料を直ぐ一所に集中して輸贏を一時に決し敵の戰鬪力を根底より打破する事が出來、

一　戰爭と講和の性質

通信機關、財政用兵術や兵器に至つても、速に決戰を行ひ得る樣に出來て居る。經濟上の關係も古代と異なり、大規模の戰鬪の行はるゝ結果、戰久しきに及べば及ぶ程、國民の痛苦も甚しく、單に戰を開かうとする恐丈でも、商業上財政上に著しい打擊を與ふるのであるから、近代の戰は成る可く短期の間に勝敗が決せらるる。勝敗の決を見ずとも成る可く速に平和を恢復しようとする。

さて又前言ふ如く戰爭は、常に或る目的を遂げようとする政治上の一手段であるから、慘憺たる戰爭が終れば、必ず講和の折衝が來らねばならぬ。苦心努力の結果、收穫の豐富なるを願ふと同樣である。卽ち政治家は戰爭を行ふを要する一般の狀況を作り成し、其の上戰を開く可き時期を選定し、戰爭を行ふべき實際の方法に關しては、之を軍人に委ねて容喙せず、決戰果てゝ後、再び樽俎の間國家の大事を極めねばならぬ。そして戰の原因となつた政治上の爭點又は戰鬪程

度の大小は應じ、自ら終局に明不明が出來、講和の種類に大小がある。隨つて國家の死活戰の終りを定むる終局或は講和の如き、又政治的爭點の廣き範圍に影響を及ぼすべき場合等自然劃然たる結果を示し、或は大規模な講和の交渉を重ねねばならぬ。併し講和の大小が戰爭の經過に關する事は無論である。卽ち古代の戰に見る樣に決戰的會戰を求むる事が困難で、自然戰爭の永引く樣な場合、敵味方とも疲れ果て、其の結果は殆んど有耶無耶の間に終る樣な事もある。十字軍の終局の如きは、多少此の感があるのである。之に反して近代の戰役では、大規模な戰鬪で速に決戰を遂げ、明瞭な巧妙な講和で其の決を定むる樣にしたのである。以下少しく重要な實例に就いて、戰爭と講和の趨勢を觀察せねばならぬ。但し紙數に制限があり、內亂に關する事、又は蒙古諸大汗の西征の如く、終局の甚だ曖昧な者は之を省くことにする。

二　上古より近古に至る戰爭と講和

波斯戰爭　上古史に於て劈頭に顯はるゝ大戰役と云ふ可きは、波斯戰役卽ち希臘と波斯との二大勢力の衝突である。言ひ換ふれば歐羅巴の文明を代表せる希臘と西南亞細亞の文化を代表せる波斯との攻爭である。元來この兩民族の性質は種々な點にて相違し、感情の上から云うても軋轢を免かれぬ。又經濟上から云うても希臘人は夙くから航海通商を盛に營み、小亞細亞邊の海岸へも植民をしたのである。從つて亞細亞人との衝突は早晩避け得ぬ事であつて、一大戰の起るは止むを得ぬ次第である。紀元前五百年イオニヤ族(希臘族)の植民地ミレッスの人々が、眞先に兵を擧げて波斯王に叛き、希臘のアテネは二十艘の軍艦で之を救ひ、サルデの都會を燒き拂つた。併し遂には波斯軍に破られ擊退されて終つたのである。

波斯王ダリウスは之を聞いて大變腹を立てた。傳說に依れば、王はアテネ入寇の報を得ると同時に、空に箭を放ち『ツォイスの神よ、予は誓つてアテネ人に復讎せん』と言ひ、其の後毎日晝飯の折侍臣をして『王アテネ人に復讎するを忘るゝ勿れ』と言はせたとの事である。畢竟希臘に對し、死活の戰を行はねばならぬ王の決意を示したのである。王は直ぐと兵を出してイオニヤの亂を鎭め、ミレッス市を屠り、其の民を多く殺し、婦人小兒の類は、チグリスの河口に近く遷されたのである。アテネの敵愾心は非常なもので、ミレッスの慘狀を劇に仕組み、波斯に對する敵愾心を鼓舞する者も出た。其の後波斯王ダリウス及びクセルクセスが、大軍で希臘に攻込んだ際も、アテネは聯合軍の中心となり、波斯の軍を打破つたのである。其の後尙ほ暫くは爭も打續いたが、遂に紀元前五世紀の中頃には、戰の終を見る樣になつた。

戰の打續く事實に二十一年、畢竟此の當時は前言ふ如く、直に決戰的會戰を行ひ得ぬ不便があり、又希臘側の團結が日を追うて加はり來り、兵數の優れる波斯軍を度々打破つたから、戰が斯樣に永引いたのである。斯て戰爭の意義の重大でむつたに係らず、其の結果は誠に曖昧なもので、啻に波斯が小亞細亞なる希臘植民地を棄てたと謂ふに過ぎなかつた。戰爭が永引いて敵味方ともに疲勞し、肝要な戰爭の目的卽ち根本問題が、充分解決されずに濟んだのである。得られた平和は啻に休戰に過ぎぬのであつた。

アレキサンドル大王の東征　希臘と波斯の戰はかく未解決に終つたが、其の後希臘のマケドニヤにアレキサンドル大王出で、希臘の諸邦を統合し、其の盟主となり、昔から行はれて來た所謂東西衝突の死活戰を繼續する事になり、紀元前三百三十四年大軍を起して、波斯遠征の途についたのである。かくて攻伐する事十

年、小亞細亞、シリヤ、埃及等を取り、進んでは波斯を滅ぼし、印度を侵し、バビロンに凱旋して、玆に東西の文化を融合せる大帝國を造る樣になつた。波斯戰役以來の大問題を一朝にして解決するを得たのは、大王の不世出の英資に依るものゝ、又戰が東西死活の爭であつた爲である。

ポエニ戰役　其の後西方では、羅馬民族とフェニキヤ民族の代表者であるカルタゴ人の戰爭が起つた。羅馬が伊太利半島部を統一し、陸上の經營に一段落を告ぐる樣になつてからは、猛然地中海にも其の勢を展べ、商權の擴張を計り、大陸での地位の不安を、海上の威力で抑へようとしたのである。處が地中海には女王の盛名を擅にして居るカルタゴが居る。カルタゴは亞弗利加の北岸に蟠居し、シシリー、サルヂニヤの大部を所有し、コルシカや南西班牙から貢賦を徵し、其の戰艦商船は海上に横行し、西部地中海は宛然『フェニキヤの湖水』と呼ばるゝ樣に

なり、遂にカルタゴ人は『吾人の許無くして誰人もフェニキヤの湖水に其の手を洗ふを得ぬ』と傲語する樣になつた。羅馬にして此の海上に力を展ぶるなら、カルタゴは自國の存立を危くする者として、反對するであらう。又カルタゴにして頑强な反抗を試むるなら、羅馬は自國の死命を制せらるゝものとして、飽まで奮鬪すべきである。かくてシシリーに於ける羅馬、カルタゴ兩國民の政治的紛爭が近因となり、久しく鬱結せる兩國民死活の奮鬪が發かれたのである。所謂ポエニ戰役とは是である。戰役は第一回から第三回まで打續き、紀元前二百十八年から同百四十六年まで百十八年を閲して居る。併し其の中、戰鬪休止の年を差引かば、正味四十三年となる譯である。かく多年の星霜を閲したのは、矢張前曰ふ樣に直ぐと決戰的會戰を試み得ぬ結果であつた。戰は慘鼻の極を呈し、雙方少なからず弱つたものゝ、元來が兩國民間の死活戰であるから、第一、第二、兩戰役（何も羅馬方の勝利）の終に講じた樣な姑息な方法では到底解決さるゝもので無い。第二戰役の和約の一は、『カルタゴは羅馬の許無しに羅馬の與國と戰ふを得ぬ』との事であつた。處がヌミヂヤの王で、羅馬の味方たるマッシニサは、此條約を利用し、頻りとカルタゴの背部を衝いた。カルタゴは苦し紛れに之と干戈を交へたから、條約違反の名の下に、羅馬の討伐を蒙る事になつた。此の折カルタゴの視察から還つたマルクス・カトーは、カルタゴの勢又も盛なのを說き、齎らし還つた鮮かな無花果の實を元老院の議員等に示し、『此の美果を產する地は羅馬から三日航程の處にある……カルタゴは滅ぼさねばならぬ』と叫んだ。カトーの意は遂に行はれ、カルタゴは空しく滅亡の悲運を招いたのである。兩國間に蟠れる死活戰の活劇は、かくして其の幕を閉ぢたのである。

十字軍

已にして東方には彼のサラセン帝國が起り、其の文明は頗る鞏固なもの

十字軍出征軍士出發の光景

であつて、回教文明を中心とし、希臘、羅馬、バビロン、アッシリヤ等諸國の文明を融合し、能く之を統一して優秀なサラセン文明を造つた。然るに此のサラセン文明の反動として、有名な十字軍なるものが起つた。矢張前の波斯戰役の樣に、亞細亞と歐羅巴との衝突と謂うて宜しいのである。そして戰の起因となつたのは、經濟的の方面にも關係し、西歐に於ける人口の增加、經濟生活の變革等から生じた庶民の活動に依るものがある。併し主なる原因は宗教的である。回教對基督教の

爭である。卽ち當時イエルサレムなる耶蘇の墳墓は、回教徒なるセルヂウク土耳其の手に移つて居たから、此地に參拜する西歐の基督教徒は非常な虐待を受け、之が爲め王侯、武士、僧侶、庶民の別なく、西歐の民心は大に激昂し、聖地恢復の爲め、異教徒と鬪ふを無上の光榮とし、玆に十字軍の奮起を促したのである。勿論、西歐諸國民の熱心な宗教的活躍に依るのであるが、强ち諸國民の死活戰と云ふ樣な譯で無いのである。

十字軍は千九十五年に始まつて、千二百七十年まで其の間百七十五年の星霜を閱して居る。是れ亦直ちに決戰を試むる事の困難であつた爲である。第五回目の十字軍に一時聖地の恢復を成し得たが、第一回から七回までの十字軍は概ね皆失敗に終つたのである。其の戰後に及ぼした影響は、各方面とも決して少なくは無いが、戰の終局は誠に曖昧なものであつたのである。云ふまでも無く、直ぐと

決戰を求むる事が出來ず、戰が永引いた爲め、敵味方とも疲れ果て、かくは龍頭蛇尾に終つたのである。

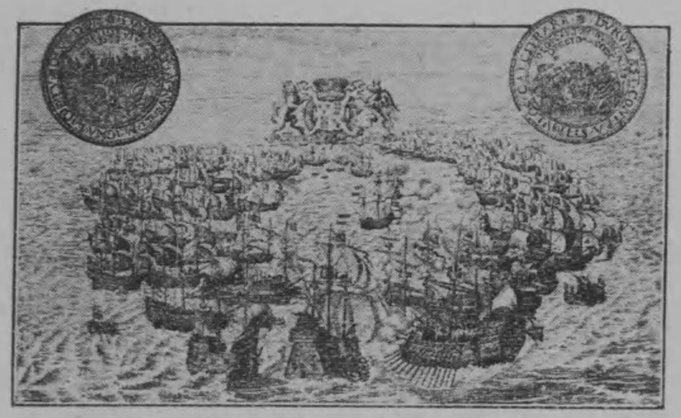
百年戰役　此の後六十餘年を過ぎ、有名な百年戰爭が起つた。卽ち英吉利と佛蘭西との爭である。當時の英吉利王は佛蘭西西南部のギエンヌを持つて居り、遂に之を基として佛蘭西の全部を併せ樣とし、佛は又英の勢力を悉く大陸から追拂はうとした。加之、英王エドワルド三世の折、英は對岸のフランドルと通商が頻繁であつて、英吉利から原料の羊毛を輸入し、フランドルでは此の羊毛で羅紗を製造し、且つ之に染色する事さへ起つたのである。此の經濟關係からして英吉利は何時でもフランドルを佛國征伐の際に於ける同盟者と見做し、時には羊毛の輸出を盛にして其の甘心を求め、時には其の輸出を止めて彼を脅かし、始終英國の意に從はせんとしたのである。隨つて佛蘭西は自らフランドルの領を併せ、百

年の禍を一朝に絶たうとし、英は飽まで之に反對せんとしたのである。畢竟百年戰役の遠因は、かく一般政治上、經濟上に關係を有する。かくて千三百二十八年佛のカペー朝王家で男統が絶え、支流バロア家の祖フィリポ六世が位に卽いた。處が英國王で佛王フィリポ四世の外孫なるエドワルド三世は、政略上佛王の位に上る權ありと唱へ、兵を擧げて佛蘭西に侵入した。時に千三百三十七年で、百年戰役はかくして起つたのである。實に百年戰役の原因は、一般政治上の衝突と經濟的利權の反對から起つたのである。そして此の場合、英國は其の大陸發展の一目的から爭つたが、佛にとつては死活の戰ひであつた。戰爭は千三百三十八年から千四百五十三年まで、所謂百餘年の永きに亙つた。決戰がかくの如く永引いたのは前言ふ通り交通不便の爲め、戰鬪材料の集中が捗らず、武器用兵術の類も速な決戰に適當しなかつた爲め等であらう。（クレシー役に英軍が大砲を用ゐた事は

有名な話であるが、其の利用は決して盛であつた譯でなく、全局の決戰に何れ丈の影響があつたか疑はしい）又古代には大規模の戰鬪が行はれぬ結果、戰が經濟に及ぼす影響も緩やかであつた爲であらう。英軍はクレシー、ポアチエー、アゼンクール等の戰に頻りと佛軍を打破つたが、最後にジャンヌ・ダルクの獻身的努力で、オルレアンの圍を解く事が出來、英軍を悉く國外に追放ち、別に講和の必要なく、佛國内の英領地は悉な佛蘭西に併せられて終つた。佛蘭西國民の大なる努力は能く其の效を奏し、自國民の死活戰に最後の勝利を占めたのである。

無敵艦隊　其の後百三十餘年を經て、西班牙艦隊の英吉利攻擊となつた。所謂無敵艦隊の入寇是である。そも西班牙は舊敎の代表者であつて、英吉利は新敎主義の國である。然るに和蘭獨立役の際、英國は同じく新敎主義の國である和蘭に結び、西班牙に當る事になつた。のみならず蘇格蘭の女王メリー・スチュアートは舊

敎主義で、西王フィリポ二世の援を得たが、千五百八十七年英のエリザベス女王に殺されて終つた。フィリポ二世は憤りに堪へず、奮然英國を攻め、全然之を壓服し、悉く新敎の方針を更めさせ樣としたのである。此の點から無敵艦隊の起れる一因は、確に宗敎的であると云ふ事が出來る。又西班牙のフィリポ二世は、その父なるカール五世と同じく、英國が佛蘭西に附くのを恐れたので、一面新敎徒たる英王エリザベスを誘ひ、佛に對する同盟を造らん爲め、婚儀を女王に申込んだ。併し女王は之に應ぜず、斷然反抗の態度を示し、又西の經濟的利權を侵したから、フィリポも餘儀無く干戈に訴へ飽まで目的を遂げ樣としたのである。此の點から言へば無敵艦隊の擧は、一般政治上の原因（精神的經濟的）にも依るのである。此の擧は西班牙方では啻に政治上の一方針を行はうとしたのであるが、英國にとつては死活の戰であつたので、一旦海陸で敗れたが最後、全土を擧げてフィリ



英吉利艦隊と敵艦隊との大衝突
無敵艦隊の滅亡を記念メタル

ポ二世の制壓に苦む樣になつたであらう。

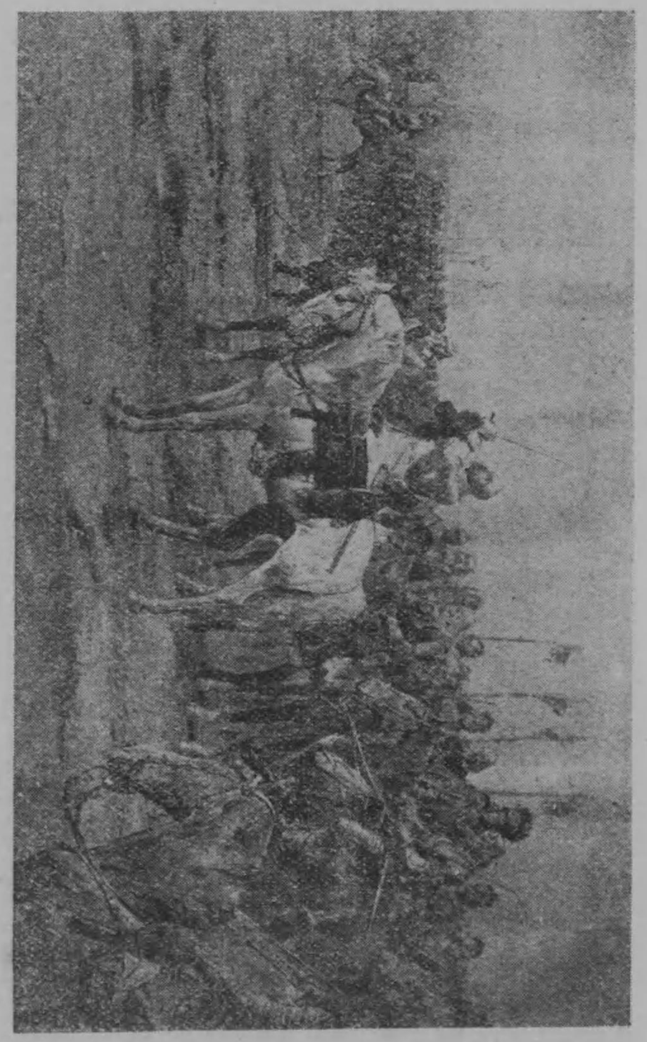
此の役西班牙王は百三十艘の軍艦に二萬餘と云ふ夥しき兵員を乘り込ませ、兵器糧食を山の如くに積み載せ、千五百八十八年五月西班牙の海岸を發した。英國の騷は一通で無い。エリザベス女王は直ぐ樣回狀で英國の各州から義勇兵を召び寄せた。處が難に趣き、外敵を攘はうと云ふ決心から募に應じた者が五六萬の多きに上つた。女王はチルベリーの陣營に趣き馬に跨り、列み居る將卒の間を乘り廻し、『汝等は未曾有の國難に際し、充分

の努力を致さねばならぬ。英國の寸土と雖も敵手に委ぬ可らず。朕は國の爲め、朕の名譽の爲め、戰場の塵に此の身を埋めやうぞ』と宣はれた。之を聞いて奮ひ立つたは陸兵のみで無く、海軍の士氣も大に昂がり、王家所屬の船四十艘、其の他各州から募られたもの百四十艘、而も噸數では西班牙方に劣つて居た。かくて西班牙の艦隊がカレー沖に碇泊して居る際、英艦隊は火船を縱つて之を燒き、殘艦隊はダンケルクの西南に脫れたが、英艦は之を追立て驅立て頻りに惱ましたのである。西艦隊は此の戰に少からぬ損害を受け、遂に蘇格蘭を迂回したが、土地に不案内であつたのと暴風に出遭つた爲め、散々失敗して本國に歸つた。軍艦の還つたのは僅に從前の半數であつたのである。畢竟英國民の努力が能く其の效を奏し、逸早くも決戰の功を擧げ、講和の必要もなく、西班牙國家の意氣を著しく銷沈させ、以後英國の威力は駸々と進んだのである。

三十年戰役　三十年戰役は主として宗教上の爭ひで、獨逸に於ける新教徒と舊教徒との軋轢から始まつたのである。彼のアウグスブルクに於ける宗教和約の行はれて居る中は、新教徒に對する迫害も行はれず、暫くは平和の有樣を保ち得たのである。處が其の後、舊教徒が威力を振ふようになつたから、新教徒も之に對抗する樣になり、前者は『神聖同盟』、後者は『福音同盟』と云ふ結社を造り、互に相爭ふ樣になつた。かくて千六百十八年、熱心な舊教信者ハプスブルク家のフェルヂナンド二世が、ボヘミヤ王となつたが、此國の新教徒は之を悅ばず、斷然叛旗を擧げ、別に新教の王を選み、イスエタ派の僧侶を逐ひ拂うた。已にしてフェルヂナンドはボヘミヤ王から皇帝の位に上つたが、高壓手段でボヘミヤの亂を鎭めて終つた。卽ち三十年戰役の第一期で、千六百二十三年に終つたのである。されば第一期の戰爭は先づ宗教的の動因から起つたものと謂うて宜しいのである。次で第二期の戰も丁抹王クリスチャン四世が、新教徒の保護を唱へて獨逸に亂入した事から起り、第三期の戰は瑞典王グスタフ・アドルフが同じく新教徒の擁護を名とし、兵を獨逸に入れた事から始まつたのであるが、此折には瑞典がバルト海を制せんとする政治上經濟的の目的も含んで居たのである。第四期には宗教的目的は單に口實に過ぎず、主として經濟的の利益のみを目的とし、瑞典、佛蘭西と墺太利等の間に激戰が行はれたのである。そして第一回は單にボヘミヤの宗教的內亂に過ぎぬのであるが、叛徒に取つては死活の戰であつた。第二回以下の戰は丁抹、瑞典、佛蘭西の諸國にとつて宗教上經濟上の或る目的を遂げん爲であつて、死活の戰と云ふので無いが、獨逸に取つては之と正反對であつたのである。

戰は第一期戰の始め千六百十八年から第四期の終り千六百四十八年まで略三十年間に涉つたが、畢竟當時の戰鬪では前言ふ通り決戰の期を早むる譯に行かな

かつたからである。此戰役中特に目覺しき活きをやつたのは、第三期戰のグスタフ・アドルフである。千六百三十二年リュッツェンの戰で、獨逸の名將ワレンスタインを破つたものの自らも戰死を遂げて終つた。かくする中何れの國々も戰に疲れたので、千六百四十八年ウェストファリヤの條約となつた。此條約は戰亂に與つた多數國家の關係を定め、殊に獨逸の運命を定むるので、會議も可なり大規模であつた。關係諸國の委員はウェストファリヤのオスナブリック及びミュンステルで會議を開き、大凡次の樣な事を決めたのである。(イ)和蘭と瑞西とを神聖羅馬帝國から各獨立國とすること。(ロ)佛蘭西はストラスブルヒを除き、アルサスの殆ど全部幷にロレーヌでメッツ、ツール、ベルダンの三僧正領を得ること。かくして佛はライン河方面に根據地を得、獨逸に向ふ可き門口を得たのである。(ハ)瑞典は前ポメラニヤと其附近の地を得、オーデル、エルベ、ウェーゼル三河の河口を制し、



（ペ樣な譜に軍中軍フルドア・フォスゾ）戰のシェッツェリ

之を代表して帝國聯邦議會に參列すること。(ニ)加特力、ルーテル、カルビンの三教徒は同じき權利を得。(ホ)ブランデンブルクは東ポメラニヤ等の增地を得ること。

西班牙王位繼承戰役　ウェストファリヤ條約で、歐洲に於ける『勢力平均』は能く保たれたものゝ、佛蘭西のルイ十四世が所謂『朕は國家なり』の主義で以て、萬機獨裁の政治を行ふやうになり、盛に隣邦に威力を示し、『勢力平均』の關係を破る樣になつた。西班牙のチャールス二世に子なく、近親佛王ルイ十四世の孫アンヂュ公フィリポを嗣となし、千七百年を以て死んだのである。そこでルイ十四世は、『佛西の間已にピレニー無し』と豪語し、西班牙を併せて、其の豐富な植民地を取り、一大植民帝國を組織する考であつた。其處で英國は和蘭、獨逸と聯合し、獨逸帝レオポールド一世の第二子カールを推して西班牙王となさうとし、佛西二國と

戰ふ樣になつた。畢竟此の戰は『勢力平均』の主義(結局精神的經濟的)に就ての爭であつて、直接國民間の死活戰で無い。併し列强相互の爭とて所謂十三年に涉れる歐洲の大戰となつた。戰の永引いたのは、矢張速に決戰を得なかつた爲である。千七百十三年のユトレヒト講和も、多數諸國間の關係を定むるものとて、極めて大袈裟のものであつて、(イ)諸國は佛西二國の合併せぬを條件とし、フィリポの西王たるを認むること。(ロ)ブランデンブルクの主權者に王號を許す事。(ハ)英はジブラルタル、ミノルカ島等を西班牙から、ノヴァ・スコチヤ等を佛國から得る事にした。翌年獨逸は別に佛國とラスタットに條約を結び、西領ネーデルラント、サルヂニヤ、ナポリ等を得る事になつたのである。

北方戰役　バルト海の周圍の土地を略し、此の海を以て瑞典の湖水の樣にし、主として經濟的利權を張らうと云ふのは、實にグスタフ・アドルフ以來、瑞典の理想と

ピーター大帝

なり、同時に其國是となる樣になつた。然るに此の方針は露西亞、波蘭、丁抹の苦痛とする處であつて、飽まで之に反對せねばならぬのであつた。實にバルト海の專有は、露西亞、瑞典等の死活問題とする處となつた。此の折、瑞典ではチャールス十二世が年少で卽位したから、露のピーター一世は丁抹や波蘭と相談し、瑞典領土の分割を計つたのである。瑞典は今方に立國の大本を覆されさうとしたのである。チャールスは默止する譯には行かぬ。千七百年疾風の如くに丁抹を攻めて之を降し、露の大軍をナルバで破り、進んで波蘭を侵し王の廢立を行うた。此の折露のピーターは決して

チャールス十二世

落膽せぬ。『吾人は最初、瑞典に敗られた。併し之により如何にして瑞典を降し得るかを學んだ』と云ひ、千七百七年チャールスの再び露西亞に攻込んだ際には、舊都モスコーに至る沿道を荒し、次第に敵を奥深く誘うて、只管其の力を弱め、千七百九年ポルタバの戰に、大にチャールスを破つた。其の後チャールスは本國に還り、諾威との戰に勇敢な死を遂げ、千七百二十一年露西亞、瑞典兩國間にニスタットの和約が成立つた。戰は前後を通じ二十一年に渉つたが、こは當時以上兩國が決戰の期を早め得なかつた爲である。講和は開戰の目的が遠大なりし丈あつて、其の會議も自ら大

規模であつた。卽ち露は之にてフィンランドを瑞典に還し、バルト海南岸のエストランド、リヴォニヤ、インゲルマンランド等を得、瑞典は其の立國の大本を捨つる樣になり、國勢俄に衰微に傾いたのである。

墺太利王位繼承戰役・七年戰役　ハプスブルク家男統の終り、墺太利のカール六世帝には皇太子が無い。處で女子の相續權は獨逸の相續法に決めて無いから、帝は在世中『プラグマチック・サンクシオン』と名付くる家憲を制定し、全墺領、卽ち墺洪二國ボヘミヤ及び其の他の所領は分割されず、悉く其の女のマリヤ・テレサに傳はる事にし、佛蘭西の承諾を得たのである。處が千七百四十年帝の殂落後、バヴリヤ侯カール・アルベルトは繼承權を唱へ、墺の瓦解を望んで居る佛蘭西が之を援け、サクソニヤの選擧侯西班牙王も亦異議を唱へたのである。無論一般政治上から執つた手段である。又普魯西のフリードリッヒ大王はシレシヤの割讓を得て、マリヤ・テレサを承認しようとした。併しマリヤは之に應ぜぬので、大王は兵を擧げ、シレシヤに攻め込んだ。大王の父は『プラグマチック・サンクシオン』を認めたのであるが、彼は夫にも關せず、宣戰もせずにシレシヤを占領した。云はば切取强盜の所爲である。晩年に大王は其の動機を子孫に語り、『當時の朕の目的は領土を擴げ、朕及び魯普西の名譽を擧ぐる爲に過ぎなかつた』。かく云ふたのを見ても、此間の消息を知る事が出來よう。畢竟普魯西は政略上統一した領土を作る必要上、かかる亂暴な手段を用ゐたので、一般政治上の目的（主として經濟的）から此戰爭を始めたのである。併し墺太利側では此の戰に敗れたが最後、シレシヤと云ふ廣大な膏腴な地を失ひ、其の上マリヤ・テレサの帝位も危く、國是の全般に大きな影響を及ぼすかも知れぬ。加之バヴリヤ、西班牙、サクソニヤ、佛蘭西も既に國內に迫つて居る。誠に危急な際であるので、取も直さず死活戰（經濟

的精神的から云うて)であつたのである。マリヤ・テレサは止むなく洪牙利の貴族に訴へ、其の義勇兵でバヴリヤ、佛蘭西等の軍を破り、植民政策で佛と爭うて居る英國、又は露國などの援を得、段々其の勢を恢復した。

かくて戰亂は八年に渉り、列國は皆疲れ果て、英國の如きは早くも其の手を引かうとした。よりて千七百四十八年所謂アーヘンの和議が成つたのである。無論當時は稍用兵術兵器等も進んで來て、多少決戰を早むる事も出來たのであるが、外交關係が複雜して敵味方の勢力も平均する樣になつたから、割合戰が永引いたのである。講和の條項は、(イ)普國のシレシヤを有する事を認む。(ロ)普は『プラグマチック・サンクシヨン』を認むる事等であつた。

併しアーヘン條約は、此の戰の樣な複雜廣大な政治的爭點から起つたのを決めるには充分で無かつた。此の折マリヤ・テレサは決して普魯西と心から講和を望

んだのでは無い。其の與國なる英國が、財政の困難から手を引かうとした故、餘儀無く和議に應じたのである。尙又此の條約では英佛の關係も何等取極められて無い。其の植民戰爭の根本に就ては、少しも議定して無いのである。云はば此の條約は列國の經濟的逼迫から止むなく結ばれた休戰と同じである。戰後八年の間、普魯西は主として戰備を修むるに努め、墺太利はシレシヤの恢復を目的とし、公使カウニッツをして佛蘭西王ルイ十五世の寵姫ポンパヅール侯爵夫人を說き、佛を味方とし、別に露西亞、瑞典と同盟を結び、普魯西を分割してブランデンブルグ時代の狹少な領土に縮め樣としたのである。普の國是(經濟上將た精神上)に大なる打擊を與へんとしたのである。普は此際英國と結べる外、何等同盟を有する事が無く、殆ど歐大陸の半ばを相手にしての戰爭で、實に一國に取つての死活戰である。又墺國にとつても戰に負けるが最後、廣大な土地を取られて、帝位も危く

なるかも知れぬ。矢張、國にとつての死活戰である。相互の同盟に入いつた英佛二國は、前と同じく其の植民的政略から印度亞米利加の方面で爭はうとしたので、佛はアーヘン條約後、凡ゆる努力を以て海軍力を發展させ、英國も同じく海軍を擴張し、千七百四十九年には千七百二十七年當時に比し、海軍力で五萬噸の增加を來した程である。かくてフリードリッヒ大王は戰機の迫つたのを知り、逸はやく兵を擧げ、サクソニヤに侵入し、戰端は茲に開けて、千七百五十六年から千七百六十三年に涉る所謂七年戰役となつた。

此の役の最初は普軍頻りに戰捷を收め、千七百五十七年ロスバッハに墺佛の聯合軍を破り、尋いでロイテンに墺軍を屈した。處が千七百五十九年墺露兩軍の爲にクネルスドルフに敗られ、引續いて墺露兩軍は伯林を占領し、英國も從前の通り軍資を普に送る事を止め、自國の兵員も亦缺乏し、フリードリッヒ大王は常に毒

を懷にし、愈々の場合之を服して自殺を遂ぐる覺悟であつた。處が運命と謂はうか幸運と謂はうか、露のエリザベス女帝が死んで兼々大王を敬して居るピーター三世が位に卽いた。帝は墺國に對する宣戰の勅に、『吾人は大王と共に力を合せ、全世界を征服せねばならぬ』。かく云ひつゝ、奮然大王の味方についたのである。併し何程も無くピーターは皇后カザリンに廢され、遂に弑せられて終つた。が其後を繼いだカザリン二世も先帝の如く普に好意を表し、中立の主義を執り、遠征の軍を引擧げて終つた。是れから普の勢は再び盛になつたのである。此間印度と亞米利加では、英佛二國の間に所謂植民地七年戰役が行はれ、亞米利加印度で英軍は頻りと佛軍を打破つた。かくて列强の間には大戰が打續いて愈々疲弊が甚しくなつた故、千七百六十三年英佛二國は巴里で平和の條約を結び、其の後直ぐと普墺の間にフベルツスブルク條約が結ばれたのである。段々用兵術が進み兵器等

が改良され、多少決戰の期を速め得たに係はらず、戰亂が七年の永きに渉つたのは、外交關係の變轉から、彼我の勢力狀態が時々變つた爲である。

講和の大體は戰爭の目的が大なりし丈け複雜を極め、繼承戰役以來の懸案を決定し得たのである。巴里の條約で、(イ)英は佛から加奈陀、ケープ・ブレトン島、ミシシッピ河東の佛領を取り、(ロ)印度のポンヂシェリー、シャンデルナゴルを佛に還し、(ハ)英はミシシッピ河西の佛領を西班牙に與ふる等種々な事が極められ、概して北亞米利加は新敎的のアングロ・サクソンに與へらるゝ事になり、舊敎的ラテン種は勢を失つた。フベルッスブルク條約で墺は普のシレシヤを有することを重ねて承認し、普はマリヤ・テレサの太子ヨセフを皇帝に選むべき事を約した。卽ち此の條約で普は墺國と對等の地位に立ち、未來に於ける勢力の向上を豫言し得る樣になつた。實に七年戰役は宗敎的戰爭で無いけれど、舊敎的の佛墺二國の力を弱め、新敎的英普二國の勢力を强めたのである。

三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和

伊太利征伐　佛蘭西の大革命は歐洲一般の狀態を甚だしく一變させ、世界の大勢をも動かした大亂である。千七百八十九年には國民議會の組織が成り、巴里の亂民はバスチーユの牢獄を破り、佛蘭西全土を擧げて禍亂の裡に投ぜられた。千七百九十年には立法議會が出來、王政廢止の說さへ起る樣になり、普墺二國の聯合軍が共同して佛王ルイ十六世を救はうとした故、千七百九十二年立法議會は王に迫つて墺國に宣戰させた。其の後立法議會に代つて國民公會が起り、王政の廢止共和政治の成立を宣言し、千七百九十三年王の罪を議し、遂に之を斷頭臺上に殺したのである。さて列國は之を聞いて非常に驚き、革命の勢を抑へようとし、

普、墺、英、蘭、西の諸國が同盟軍を組織し、四方から佛蘭西に迫つた。所謂第一回列國同盟である。其の中佛國では國民公會の恐嚇政治が終り、千七百九十五年都督政府が起つた。政府は三軍の師を起して墺國を攻めさする事にし、モローにはライン軍、ジュルダンにはマース軍、一代の英傑ナポレオン・ボナパルトには伊太利軍を與へ、三道から併び進ます事となつた。畢竟同盟の一なる墺國を屈する一般政治上の方針に出でたので、墺國にとつては死活の戰である。

最初の二軍は敗れたに係はらず、ナポレオンの軍のみは、秋風の枯葉を捲くが樣、忽ちに北伊太利を平定し、東アルプの險を攀ぢ、ウィーンを指して進んだ。是れ主にナポレオンの用兵的天才が、此場合遺憾なく發露され、決戰の期を早めたのに依るのである。かくて千七百九十七年十月、ナポレオンはフランシス二世帝と所謂カンポ・フォルミオの和約を結んだ。無論戰の目的に應じて其結果も華々しく、(イ)墺は白耳義各州を佛國に讓り、(ロ)ライン河を佛の東境とし、(ハ)其の上墺は伊太利に起されたチサルピナ共和國の獨立を認むる事にし、(ニ)墺に伊のヴェニスを與へ、(ホ)佛はイオニヤ諸島を得る事になつた。佛が此の諸島を得たのは、他日東方に廣大な領土を得た折、之を本國と東方領土との繫にしようとしたのである。

墺太利征伐　ナポレオンの英國を抑へんとして執つた手段の一は、地中海の制海權を占め、印度を略し、英の寶庫を閉さうと云ふのであつた。かくてナポレオンは都督政府の許を受け、此の大業を成さうとしたが、南風競はず、アブキールの海戰に英の俊傑ネルソンに一籌を輸し、アークルの圍も其の功なく、急ぎ本國に引還した。その中、英の宰相ピットの盡力で、英、墺、露、葡、土の第二回列國同盟が成り、頻りと佛軍を破つて國境に迫つた。此の際ナポレオンは都督政府の代り

に、執政々府と云ふものを立て、自身執政の一人となり、先づ墺太利の征伐に向つた。矢張同盟の一なる墺太利を屈せんとする一般政治上の方針に出でたので、墺にとつては存亡を賭するの戰である。

千八百年モローに一軍を與へ、ライン河畔に進ませ、ナポレオン自ら別軍を率ゐ、大サン・ベルナルドの險を越え、迅雷耳を蔽ふ暇も無く、一萬五千の兵を以て伊太利に出で、優勢な墺軍の虚を衝き、マレンゴの役に華々しき勝を得たのである。次でモロー將軍もホーヘンリンデンで勝ち、ウィーンを指して進んだ。かくて千八百一年有名なリゥネビール條約が結ばれた。勿論佛と墺との和約である。并年ならずして講和の運びに至つたのは、主にナポレオンの非凡の將才に依るのである。條約は戰爭の目的に應じ、可なり大規模であつて、(イ)墺はライン左岸の地を悉く佛國に割き、(ロ)先きに佛蘭西で置いたバタビヤ、チサルピナ、リグリヤ、ヘルベチヤの各共和國を認むる事に決めたのである。

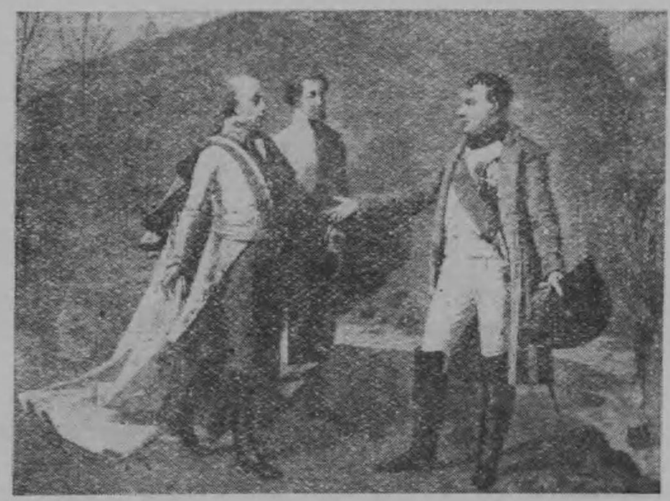
其の後同盟の一員で、ナポレオンが植民政策の敵と見做して居る英吉利では、戰費の負擔が多いので、平和論が勝を制し、千八百二年三月の二十七日、佛國と和約を結んだ。所謂アミヤンの講和である。此の和約で、(イ)英はトリニダートと錫蘭の外、歐洲以外で佛國及び其の與國から奪つた屬領を皆其の本主に還す、(ロ)英は海軍の根據地なるマルタ島をヨハネス團體に還へす、(ハ)佛はナポリと法王領から軍を撤し、其の上イオニヤ群島の獨立を認む。斯くの如く定めたのである。

ナポレオン帝の活躍　ナポレオンの雄才は普く中外に知られ、其の威名は四海を壓する許である。かくて千八百二年には終身の執政に選まれ、超えて千八百四年には皇帝の位に卽きナポレオン一世と稱し、其の翌年伊太利王の位を兼ね、其目

三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和

的たる世界的文明主義を行はうとする樣になつた。此の折ピットは選まれて英國の宰相となり、露墺二國と瑞典とに結び、千八百五年所謂第三回の列國同盟を造つた。ナポレオンは殊更英國を惡んで、出來得る丈大打擊を與へやうとし、大軍をブーロニュに集めた。無論英の本國を侵し、之を屈服さする心算である。大同盟の主腦なる英國を擊つのは、實にナポレオンの根本政策である。之を聞いた英國では大恐慌を惹起し、無敵艦隊襲來後、稀に見るの混亂を呈したのである。所謂死活の戰であるから、出來得る限り海陸の準備を整へ、同年の十月英の提督ネルソンは二十七隻の艦隊で佛西聯合艦隊三十三隻をトラファルガルに襲ひ、得意の戰法で決戰的の打擊を與へた。惜むべし英傑ネルソン提督は死んだものの、佛西艦隊は再び立つ事が出來ぬ樣になつたのである。此の海戰でナポレオンの英國上陸策は空しく水泡に終つたのである。此の折墺露の聯合軍は、續々佛の國境に迫つて

三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和



ナポレオンとフランシスー世との會見　アウスステルリッツの戰後

來た。ナポレオンは電の閃くが如く逸早くブーロニュの營を撤し、二十萬の精兵はラインを超えてウルムに戰ひ、勝ち誇つたる其の軍はウィーンを取り、アウステルリッツまで進んだ。ナポレオンの目的は墺露を壓する政略に出でたのであるが、墺にとつては國運を賭するの爭である。併し主としてナポレオンの神算は、忽ちアウステルリッツの野に墺露聯合八萬の軍を破り、決戰的の打擊を與へた。墺は茲に同盟を離れ、

和を佛に求むる事になつた。かくて其の年の十二月所謂プレスブルグの和議となり、戰の目的に應じた重大な和約が結ばるゝ事になつた。(イ)墺は獨逸西方の飛地をバーデン等に讓り、(ロ)チロルをバヴリヤに與へ、(ハ)ベネチヤ領を佛の勢力下にある伊太利王國に加へたのである。翌年西南獨逸の十六州でライン聯邦を作らせ、ナポレオン自らが其の保護者となつた。

普魯西征伐　普魯西は第一回の列國同盟に加はつたが、其後は專ら中立の態度を執り大陸の戰亂にも加はらず、表面丈は平和の生活を樂しんだものの、內部の不安は著しいものがあつた。かくて千八百六年露に應じて佛に戰を宣したのである。ナポレオンは直ぐと大軍を率ゐ、普魯西に攻込んだ。勿論之を屈し同盟軍の力を弱め樣と云ふ政略上の方針に出たのである。併し普にとつては死活の戰であつた。又もや主にナポレオンの軍略が充分其の威力を顯はした爲、佛軍はイェ

ナ、アウエルスタットに普軍を破り、遂には首都伯林をも屠り、翌年フリードランドで露普の聯合軍を破つて、速に決戰的勝利を得た。かくて此重大な戰爭の局を結んだ重要なるチルジットの和議が開かれた。無論佛と普露兩國間の和約である。

(イ)普はエルベ、ライン兩河間の地を佛國に割き、普は其の領土の大半を失ふ事となつた。此の折露帝アレクサンドル一世が種々仲裁し、普王フリードリッヒ・ウィルレム三世の皇后ルイザは、其の花の如き容顏を以てナポレオンの前に顯はれ、頻りに哀訴したに係はらず、遂に此の結果に終つたのである。其の後ナポレオンはエルベ河の西にウェストファリヤ王國を立て、之をライン同盟に加へた。(ロ)普は管て波蘭から得た土地の全部を佛に割き、ナポレオンは此にワルソー公國を起した。(ハ)普は東普の一部を露に讓つた。(ニ)露はナポレオン一世の從來執れる處置を悉く承認した。此の和約の會議中、佛露兩帝は密にニーメン河中で會合

し、世界の分割を約したと云はるゝ。卽ち佛はラチン種族を統合する大帝國を造り、昔の羅馬帝國の樣に歐洲の中央に勢力を占め、露は昔の希臘帝國を再興し、東方亞細亞に力を展べやうとしたとの事である。此の說は啻の噂に過ぎぬかも知れぬが、兎に角チルジットの和約が露佛兩帝の合意に出たことは疑が無い。

露西亞征伐　ナポレオンは印度侵略英本國侵入の兩策に敗れた故、止むなく第三策なる大陸封鎖令で英國を苦むる事になつた。卽ち歐洲大陸諸國と英國との通商を止め樣としたのである。露は一旦此法令に同意したものの、元來露は英國に多量の穀物を輸入して居たので、此の輸入を止むるは英國の爲にも苦痛であり、露の爲にも經濟上の損害であつた。露帝アレクサンドル一世は遂う〳〵封鎖令を廢棄する事になり、ナポレオンは其大方針維持の政略的手段から、大擧露西亞を侵す事になつた。露にとつては固より死活の戰であつたのである。千八百十二年

ナポレオンは總軍六十萬を擧げ、露を擊つ事となし、墺軍は右翼、普軍は左翼、ナポレオン自ら佛、獨、伊、蘭、波等の諸種族から成る中軍を率ゐた。當時佛の味方となつた墺國は財政乏しく紙幣を出さうとし、ウェストファリヤ王ジェロームは人民がナポレオンの徵發に遭ひ、貧に迫り絕望の心を起し、遂には反を計るやも知れぬと申上げた。併しナポレオンは斷然其の方針を捨てぬ。六月の二十二日ニーメンを涉り露の國境に入つた。露は軍を分つて三とし、其の中第一軍十萬はバルクレー・デ・トレー之を率ゐ、第二軍五萬はバクラチオン親王之を率ゐ、主として露の前進に當つたのである。露軍はピーターがチャールス十二世を困めた方策を用ゐ沿道を荒しつつ、且つ戰ひ且つ退き、佛軍を物資の徵發から困らせ樣とした。八月十七日佛軍は天才の將軍ナポレオンに率ゐられ、スモレンスクに來り、バルクレーの殿軍を擊つたが、決戰を得た譯で無い。バルクレーは愈々退軍を續行

し、益々佛軍を困めたが、露の國民はバルクレーがスモレンスクを敵手に委したのを咎め、露帝も讒を信じて彼を免じ、クツゾフを之に代へた。佛軍は九月七日ボロヂノに勝ち、モスコーに入つたが、偶々市中に火が起つて、全市烏有となり、佛軍は糧食宿舍にも窮し、遂に本國を目指して引還る事になつた。途中露軍の追擊と飢寒の爲め、佛の大軍は殆ど全滅の不幸を招いたのである。

かくて歐洲諸國の敵愾心は大に起り、英、露、普、墺、瑞典の所謂第四回列國同盟となり、千八百十三年十月ライプチッヒの諸國民戰役となつた。同盟軍五十萬と佛軍四十萬との戰で、所謂雙方の死活戰である。佛軍は此戰で大敗を招ぎ、唯一の退路なるエルステル河の橋梁が壞された爲め、軍の大半は河中に溺れ、殘餘一萬五千は聯合軍に降つた。四十萬の大軍は殆ど全滅に歸したのである。之から同盟軍が力を併せ、潮の如く佛の境に亂入し、遂に千八百十四年巴里を陷れた。聯合軍の巴里に入いつた際、佛蘭西の貴女數百は同盟軍の士官を見、其の手に靴に接吻し、自國の捕虜を護つて來たコサックを喝采したとさへ言はれる。ナポレオンに對する反感の著しく昂まつたのは、之でも想像されるのである。

其の後ナポレオン一世は帝位を辭し、エルバ島に流され、ルイ十六世の弟なるルイ十八世が王位に卽く事になり、五月三十日佛國と列國との和約が取り極められた。所謂第一回巴里條約である。戰爭の目的が廣大であつた樣に、和約も甚だ重大のものであつた。(イ)佛は千七百九十二年一月一日の舊態に復す、(ロ)佛は償金を拂ふを要せず、(ハ)英は佛、蘭二國に其の侵地を還す、(ニ)瑞西の獨立を許す、(ホ)和蘭は再びオレンジ家に歸し、且つ其の領地を廣めらる。(ヘ)此の會議にて未決の問題は、二箇月内に開かる可き墺都ウィーン會議に移さる可し。斯くの如く極めたのである。

ウィーン會議　第一回列國同盟が起り、佛が列國を相手に戰を開いてから既に二十二年、其の間佛蘭西は常に同盟軍の力を弱むる政略から戰爭を續け、列國は佛國の殘害を免れん爲め、死活戰を行つたのである。ナポレオン時代は戰鬪材料の集中も容易になり、用兵術等も進んで來、決戰の機を速め得たに關らず、同一目的の戰に二十餘年の星霜を費したのは、外交關係の複雜なる結果である。今や時至つてウィーンの會議となり、大亂の目的に解決を與ふる事になつた。會合は實に千古の偉觀を呈し、會の議長は墺の全權メッテルニヒ公で、露の使臣はネッセルローデ、普の使臣はハルデンベルヒ、英の使臣はカッスルレー、佛の使臣はタレーラン、其他西、葡、瑞典から何れも全權を出したのである。メッテルニヒは列國の使節を杯盤の間に飜弄し、巴里の和約後二箇月内に開く可きを、遷延漸く十一月になつて開會した。佛のタレーランは一代の外交家で機略縱横の譽があつた。會議の

會議　ウィーン

劈頭、列國の使臣は佛の代表者を會議の一員と見るを好まなかつたが、タレーランの意見では『今迄の戰亂はナポレオン對列國の戰であつて、佛と列國との戰で無い。故に佛は當然此講和に容喙して戰亂の後を整理する權あり』との事で、遂に會議の一員たる事につき列國の許を得たのである。彼は又英、露、普、墺の利害の合せぬのを見、巧に是等を離間して英墺に結び、普露を抑へる樣な氣勢を示し、自國の恢復を計らうとした。露帝アレクサンドル一世は波蘭を復し、自らが其王となり、普はサクソニヤ王國の領土を併せ、各々其權勢を貪らうとしたのである。處が英墺二國は此二つの案に反對である。此折メッテルニヒは『時の宜しきに從ひ、歐洲列國の權利關係を定むるが宜しい。各國利權の衝突する場合、外交の技能で調停を行ふべし』と云ひ、タレーランは正統主義を唱へ、『國境の分界國權の大小は、佛國革命前の歴史に依る可し』と論じ、此說が大に勢を得て來た。

兎に角、波蘭、サクソニヤの問題から露普と英墺とは相對し、再び禍亂を捲き起さうとしたが、タレーランは此の間に居て凡ゆる奇策を弄し、佛の外交上の地位を次第に昂め樣としたのである。其の後サクソニヤ、波蘭の問題で列强の折合が附き、殊にはナポレオンの再擧に驚き、早くも條約の締結を見る樣になつた。かくて會議は六月九日に終り、百二十一條から成る條約が出來た。（イ）墺はヴェニス、ロンバルヂヤ、ダルマチヤ等を取り、（ロ）獨逸の三十九州は聯邦を造り、（ハ）和蘭と白耳義とを併せ合衆王國とし、オレンヂ・ナッサウ家を其の王とする。（ニ）ナポレオンの置けるワルソー公國の大部を露に與へ、露は此に波蘭王國を起し、特別の行政を行ひ、露帝が其の王を兼ぬる事にする。其の上舊ワルソー公國の一州ポーゼンを割いて普魯西に讓り、波蘭の舊都クラカウを獨立共和國とし、露、墺、普三國保護の下に置く。（ホ）瑞西は永久中立國とする。（ヘ）瑞典は丁抹

三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和

から諸威を得る。(ト)普魯西はサクソニヤの北半及びライン河兩岸の多數市邑を得る。(チ)西班牙、ナポリ、サルヂニヤの諸國は舊君家の手に復する。(リ)英國王はハノーヴァー國王と稱するを得、且つ西班牙からジブラルタルを得、其の他歐洲以外で、ケープ植民地、錫蘭島等を得る。條約の要項は大凡かくの如きものであつた。

偖て此の會議の半ば、エルバ島に居たナポレオン帝は佛蘭西でルイ十八世が人望を失へるに乘し、千八百十五年の二月、島を脱れて佛蘭西に上陸し、帝位を恢復して威名頗る盛になつた。會議では直ぐと白耳義に居た英將ウェリントン公、普將ブリュッヘルに命を傳へ、之を擊たしむる事になつた。聯合軍にとつてもナポレオンにとつても、死活の戰である。此折ウェリントン公は聯合軍九萬五千、ブリュッヘルは普軍十二萬を率ゐて居たが、之に對する佛軍は二十萬足らずであつた。

ワーテルローの戰

三　ナポレオン大帝時代の戰爭と講和

かくて六月十八日著名なるワーテルローの一戰で、流石の天才ナポレオンも大敗を招ぎ、巴里に還り、聯合軍は引續いて巴里を陷れ、ナポレオンを大西洋のセント・ヘレナ島に流した。千古英雄の末路憫むべきでは無いか。斯くて十一月二十日有名な第二回の巴里條約となり、(イ)佛國の境界を千七百九十年の舊に復し、(ロ)佛より聯合軍に千萬磅の償金を出し、且つ向後五年間、同盟軍十五萬を北部佛蘭西に駐屯させ、佛は之に對する費用を負擔す。大凡かくの如く取極められたのである。

四　クリミヤ戰役と其の講和

露國南下の由來　露はピーター大帝の時、專ら西歐風の文明を入れ、制度文物を新にし、其の外交に於ても、次第に積極の方針を執り、北に向ひては北方戰役に依り、瑞典の鋒先を挫き、南に對しては頻りと土耳其を略し、領土の擴張を企てたのである。かくて露の女帝カタリナ二世の時には、土耳其を抑へ、之と「カイナルヂ條約」を結んだ。此條約で露は黑海に臨める入海なるアゾフ海を、露の湖水の樣にして其の沿岸の土領を取つて仕舞ひ、又バルカンに近いドナウ河口の地を奪ひ、更にクリミヤ半島に居る韃靼人の獨立である事を土耳其政府に承諾させ、且つ極めて曖昧な意味ではあるが、露は土領ワラキヤ、モルダヴィヤ二州に於ける全教會の基督教徒を保護する事になつた。將來露が二州以外のバルカンの地で、基督教徒を保護する名の下に、干渉を試むる所謂禍の種を蒔いたのである。其後十九世紀の前半、希臘獨立戰役の折、露は土とアドリヤノプルで和約を結び、土の領土を若干割かせた外、黑海地中海を連ぬるボスポロス、ダルダネル兩海峽をば、平時土が其の友邦として交際する諸國商船に、自由に通航さする事も此の條約で

極められた。云ふまでも無く露の商船が黑海と地中海とを往復し得る樣定めたのである。其の後土耳其が埃及と爭つた時、露帝ニコライ一世は土を援け、近東方面に利を得ようとした。之を聞いた英佛二國は露が東歐で獨り勢を振ふのを恐れ、土耳其と埃及の間に仲裁し、講和が遂に成立つた。併し露は此の折八年を期とし、土とウンキャル・スケレッシの條約を結び、兩國間の攻守同盟を取り極めた外、露が他と爭ふ場合、土は露の請求次第、ダルダネル海峽を閉鎖する旨を密約した。之を聞いて驚いたのは英佛二國である。二國は此の條約を妨げ、露の活動を抑へようとしたが成功せぬ。其後千八百四十一年、英佛露土普墺の六國は倫敦で協商を開き、所謂「海峽條約」を取り結んだ。卽ち土耳其は戰時各國の軍艦にボスポロス、ダルダネル兩海峽を通過させぬ事を誓つたのである。今迄は露は勝手に土耳其問題、卽ち東方問題に容喙して來たのであるが、之からは歐洲列國何れも此の

問題に干與し得る事になつた。

ナポレオン三世　佛蘭西では千八百四十八年、ルイ・ナポレオンが國民多數の贊成を得て、フランスの大統領に選まれた。彼はナポレオン一世の甥であつて、自ら信ずる事が甚だ厚い。一度思ひ立つた事は飽まで之を止めぬと云ふ人であつた。夙くから大ナポレオンの志を繼ぐ心があつたから、其の就任の初めに腹心の徒を擧げて閣僚となし、其の他僧侶の敎育に與るを許し、刑すべき罪人をも許し、只管民心の收攬を計つた。畢竟自己の野心を遂げようとする手段に外ならぬのである。斯くて千八百五十一年二月には、「非常處分」を行ひ、議會の名士を捕へ、新憲法を公にし、此の憲法で大統領の任期を延ばして十年とし、其の翌年には皇帝の位に上り、ナポレオン三世と稱した。之から帝は盛に人氣取りの內政を行ひ、一方では外征を起し國威を擧げ、自己の地盤を固め樣としたのである。

クリミヤ戰爭　其の後十九世紀の中葉に有名なクリミヤの役が起つた。卽ち野心に富める佛帝ナポレオン三世が、土耳其に迫つてベトレヘム靈地殿堂の管理權を舊敎徒の手に收めた故、露も亦「カイナルヂ條約」に基づき土領に於ける希臘敎徒の保護權を求め、土は之を認めなかつた故、露土の爭が起つたのである。云ふまでもなく表面は宗敎上の爭である。露帝ニコライ一世は土に戰を宣して兵を擧げ、其艦隊は早くも土の艦隊をシノプに襲ひ、殆ど之を全滅させたのである。處が英佛二國は土耳其に同盟し、千八百五十四年露に對して戰を宣した。畢竟英佛露の三國は何れも東歐に於ける宗敎、經濟等一般政治上の方針から兵を出したので、死活戰と云ふ樣な譯で無い。卽ち露は土を抑へて宗敎經濟的利權を東歐に張らうとし、英佛は露の權勢を挫いて同じき利權を近東に得んとしたのである。

斯て一方英佛聯合軍は艦隊をバルト海に送り、クロンスタット要塞を砲擊させ、

一方同じく聯合艦隊は黑海に入り、九月十四日三萬の佛國兵、二萬七千の英國兵、七千の土耳其兵はセバストポールの要塞を北に去る三十哩エウパトリヤの地に上陸し、次第に同要塞に進んだのである。佛軍はサン・タルノー將軍之を率ゐ、英軍はラグラン卿之を統べた。此の折メンシコフ親王の率ゐる露軍はアルマ河の背後に據守し、攻來る同盟軍に一泡吹かせんと待ち構へた。かくて九月の二十日兩軍の間に慘憺たる激戰行はれたが、遂に露軍の敗北に終つた。

クリミヤ戰役要地圖

メンシコフ將軍は止むなくセバストポールの要塞に退き、部下の造兵技師トートレーベンは港內に七隻の軍艦を沈めて港口を塞ぎ、敵艦の襲擊に備へ、其の上水兵を陸上の勤務に用ゐ、

軍艦砲を砲臺に備へ、戰機の熟するを俟つたのである。十月十七日より聯合軍の砲撃始まつたが城兵も之に應じ、手痛く寄手を惱ましたのである。包圍は不完全で一方が開いて居たから、要塞内では自由に援兵や糧食を得る事が出來た。城將メンシコフは新に援軍を得て、英土兩軍の據れるバラクラバ港附近に迫らうとした。かくて十月二十五日露兵はバラクラバの北方溪谷に顯はれ、角面堡三箇を奪ひ、之に據れる土耳其軍を擊退した。此の時英將ラグラン卿の手許にありたる兵は、各〳〵六百人を算する輕騎兵と重騎兵とであつたが、其中スカレット將軍の率ゐた重騎兵は、驀然に三千に近い露の騎兵隊に肉薄し、縱横無盡に切り立てたから、流石の露軍もしどろになつて敗退した。六百の輕騎兵もルカン伯の指揮の下に、一同轡を並べ露軍目懸けて押寄せたが、其方策を誤まつた故、死地に乘入る六百騎、彈丸雨飛の其の中に縱横無盡切りまくつたが、死地より出でゝ乘りかへる殘

る兵はいと〻僅であつた。

セバストポールの要塞では將卒共に死力を盡して守つたから、直ぐに陷落の恐も無い。加之聯合軍ではコレラ病が流行し、サン・メルノー將軍も之が爲に斃れ其上防寒具の用意も足らぬので、甚だ困んだのである。千八百五十五年ラ・マルモラ將軍の率ゐたサルヂニヤの援軍が來り、佛軍でもペリシエー將軍が新に任に就き、英軍と約して要塞の攻圍を嚴密にし、九月八日の總攻擊に佛軍は遂にマラコフ砲臺を占領した。所謂セバストポールの死命を制したのである。露の守將は餘儀無く火藥庫を爆發させて開城した。包圍を受くる事實に三百五十日、セバストポールの堅塞も敢無く同盟軍の手に落ちたのである。戰が前後三年に過ぎなかつたのは、例令當時兩軍の準備が行屆かぬ樣な事があつたにせよ、尙ほ古代の戰に比しては、戰鬪材料の聚集が便利で、用兵術、兵器等も決戰を速め得る樣になつて居

たからである。

巴里の講和　かくて千八百五十六年、英、佛、露、土、サルヂニヤ、墺、普の諸國は巴里にて講和の會議を開き、所謂「巴里條約」の締結を見る樣になつた、條約は戰爭の目的の複雜せる丈面倒であつたが、會議の議長ナポレオン三世は自ら列强の主動者となり、各國の全權を親しく巴里の輦下に集め、幾多問題に解決を與へたのは賞すべきの至である。此條約で黑海は中立となり、露國の軍艦數幷に其の大いさに制限が附せられ、露國南下の勢が防遏された。加之此の條約で、土耳其帝國を歐洲列强の仲間と見做し、其の獨立保全の主義を嚴に宣言し、之に對し危害を加ふる者ある時は、歐洲全般の利害に關係するものと考へ、土耳其問題卽ち近東問題は歐洲問題として、列强何れも之に容喙し得る事にした。

五　伊太利統一戰役と其の講和

サルヂニヤの雄圖　サルヂニヤは伊太利半島中、外國の君主を戴かぬ唯一の王國であつた。十九世紀の半カロロ・アルベルト王は墺國排斥、伊太利統一の希望を懷いて居たが、其の目的を遂げずに終つた。かくて墺は依然としてヴェニス、ロンバルヂヤ等――ウィーン條約で得た――に勢があり、擅に專制の政治を布き、言語不通の軍隊は、銃劍で土民の服從を强ひたのである。其の他には兩シシリー王國、法王領、トスカナ、パルマ、モデナ、サルヂニヤ等の諸小國が分立して、伊太利とは地理上の名に過ぎぬのであつた。處がサルヂニヤでヴィクトル・エマヌエル二世が卽位されてからは、不幸放浪の中に終つた父王の恨を思ひ、必ず先代の遺志を果さうと其の準備にをさ〳〵怠り無く、伊太利諸邦の自由統一運動も段々に盛になつた。彼の『炭燒黨』が又もや組織され、墺人を追拂つて伊の統一を計らうとし、『革命の豫言者』と言はるゝギウセッペ・マッヂニの如きも出て青年伊太利黨を組織し、益々此主義を煽つたのである。賢明なるエマヌエル二世は夙くも此氣運を利し、必ず伊の統一を成さうとし、千八百五十二年カブールを首相とし、先づ立憲自由の政を布き、軍備を擴張し、大目的の完成に只管心膽を碎かれたのである。カブールも亦雄才があつて機略に富み、大政治家の手腕を有し、伊太利のビスマルクとさへ呼ばるゝのである。常に政治經濟を究め、眼を政界に注ぎ、伊の爲に外國政府及び法王政府の拘束を退け樣とした。彼は千八百五十五年クリミヤ役の酣なる比、群議を斥けて一萬五千の兵を出し、英佛聯合軍を援け大に露軍の勢を挫き、セバストポールの糧道を絶ち、其の陷落を早めたのである。其の結果サルヂニヤの軍隊は實戰の經驗を得た許で無く、英佛二國も伊太利に好意

を注ぐ樣になつた。巴里の講和の際、カブールは伊太利の委員として出席し、墺國全權ブォーレ伯の面前で、伊太利での墺國の暴狀を述べ、列國の同情を喚び起したのである。かくて佛蘭西と伊太利との交情は段々親しくなり、のみならずナポレオン三世は伊太利が佛王フランシス一世以來、墺太利と爭つた土地であるから、サルヂニヤを援け伊太利の聯邦國を造らせ、自ら其保護者となり家門の名を張らうとしたのである。佛の援を藉るのは又カブールの希ふ處であつた。かくて千八百五十八年七月二十日ナポレオン三世は、カブールと密にプロンビエルの浴場に會し、佛とサルヂニヤとは攻守の密約を結び、翌年一月共に墺太利を討ち、伊太利での墺領は之をサルヂニヤに、ニースとサボヤは佛蘭西に與へ、伊太利には法王を盟主とする聯邦を造る事を約した。無論二人以外に知る人も無かつたのである。此の折カブールの苦心は一通で無い。即ち伊太利で聯邦を造るは彼の希望で

無く、その上ニースを佛帝に與ふれば、ニース生れの義人ガリバルヂ等の怒を招ぐ恐れがある。されどカブールは『我が名は地に墜つるも伊太利にして存すれば可なり』と、只管國事に努めたのである。

統一戰爭　此の時露西亞はクリミヤ戰役に兵を出さぬので、甚だ墺太利を怨んで居る。普魯西は獨逸の統一問題で墺太利を疑つて居る。英吉利の内閣はデルビー内閣であつて平和の主義を重んじて居る。さればサルヂニヤが佛の援を得て墺太利と戰ふには、此の上も無い好機である。隨つてカブールは一方では盛んに軍備を整へ、一方では墺太利を挑んで戰を開かするに力を用ゐた。かくてエマヌエル王は千八百五十九年一月、首府トリノで開かれた議會の開院式で、盛に挑戰の演説を試み、同月三十日佛帝の從弟ナポレオン親王はサルヂニヤ王女との婚儀を取極め、事毎に墺太利の感情を害ねた。墺は勘忍の緒を絶ち、兵をロンバルヂヤ

に集め、四月の二十三日サルヂニヤに通牒し、三日を期して軍備の中止を求めた。云ふまでも無く最後の通牒である。サルヂニヤ政府は斷然之を拒絶するに及んだ。斯て兩國の關係は敗れ、ナポレオンも四月二十九日を以て戰を宣した。佛墺二國は或る種の政略を行ふ爲に兵を出したのであるが、伊にとつては誠に大事な死活の戰である。

普は此の時局外中立を宣し、英露も亦戰爭の範圍を擴げぬ樣に力を盡した。かくて墺の總司令官ギーレイ將軍はチチノ河を渡り、直ぐと進擊の態度に出でず、却つてナポレオン三世にサルヂニヤ軍と合する機會を得させたのである。五月二十日モンテベロの戰にて、サルヂニヤ、佛蘭西同盟軍は大勝を得、ガリバルヂの率ゐた義勇軍はロンバルヂヤ迄侵入した。尋で六月四日同盟軍はマジェンタに墺軍を破り、ナポレオン三世幷にエマヌエル二世は長驅してミラノにのり込み、

ソルフェリノの戰に於けるナポレオン三世

六月二十四日有名なソルフェリノの戰に墺軍を破り、之に決戰的打擊を與へた。此の戰爭では古代のに異なり、兵器も優秀となり、佛の如きは施綫砲の類を用ゐ偵察に氣球を用ゐた程で、又戰鬪材料の集中等も便利であつた故、決戰も割合早く行はれたのである。ソルフェリノの役墺軍は皇帝フランツ・ヨセフに率ゐられ兵數は十三萬三千、大砲四百十三門、聯合軍は十五萬千二百人、大砲三百七十門、その中には施綫野砲も含まれて居た。九時間の激戰後、墺軍が大敗し、一萬三千餘の死傷を殘して退却し、同盟軍の死

傷も一萬四千を超え、敵味方の死傷者を收容するに二日を要したとさへ云はれる。此の日暗雲低く垂れ、蒸暑さこと限り無く、日射病で斃るゝものも多く、凡ゆる悲慘を極めたので、之を目擊した瑞西人ヘンリ・ジュナンは、ジュネーヴに會合を催し、赤十字同盟を組織する樣になつた。

ビラ・フランカ和約　併しナポレオンは墺太利が利を以て普を誘ひ、之から援を藉りるのを恐れ、その上サルヂニヤの統一が出來たなら、帝自らの企てた伊太利聯邦の成らぬのを恐れ、七月十一日フランツ・ヨセフと私にビラ・フランカで會見し、和約の內容を定め、次でチューリヒの本條約で、正式に取極めたのである。エマヌエルも之を拒む力が無いから、止む無く同意を表したのである。卽ち、(イ)墺はロンバルヂヤをナポレオン三世に讓與し、帝は更に之をサルヂニヤに與ふると。(ロ)パルマ、モデナ、トスカナを其の舊主に還し、ボロニヤ等の法王領を法王に還すこと。(ハ)伊の諸邦は法王の保護を仰いで聯邦を造る可きこと。大凡以上の如くである。此の條約は大規模ではあるが、斯かる大戰の決を定むるには不充分で、未決の難問を後に殘したのは疑が無い。

此の條約の內容を聞いた伊太利諸邦民の驚きは非常である。カブールの如きは落膽の餘、茫然自失し、王を罵ると二時間、遂に其の職を去る樣になつた。其の上パルマ、トスカナ以下の諸小國は、皆其の舊主に還るを望まぬ、何れも地をサルヂニヤ王に獻じ、其の配下に立つを願ふた。ナポレオンは止むなく之を認め、別にサルヂニヤからニース、サボヤの兩地を收め、其の補償としたのである。已にして英傑ガリバルヂは『武裝國民社』を率ゐ、ジェノバから海を航してシシリー島に入り、之を占領しようとした。當時サルヂニヤではカブールが再び立つて首相となり、陰にガリバルヂ等の行動を援け、英のパーマストン內閣の如きも、是等伊

國の統一軍に應援を與へた。かくてガリバルヂは輙く全島を征服し、伊太利南部に推渡り、ナポリを併せ國王を追出した。同時にサルヂニヤ軍もウンブリヤに侵入し、次でガリバルヂは其の征服せるシシリー島とナポリをサルヂニヤ王に獻じた。千八百六十年頃にはヴェニス幷に法王領の外、伊太利半島は悉くサルヂニヤの手に入つた。其の翌年トリノで伊太利の國會を開き、サルヂニヤ王エマヌエルが伊太利の王位に上り、フロレンスを都にした。引續いて列國は之を承認し、かくて伊太利統一の大業は其の大部を成し得たのである。其後千八百六十六年普墺戰役の折、伊は墺からヴェニスを奪り、千八百七十一年獨佛戰役には、佛蘭西の守備軍を追出して法王領を併せ、都を羅馬に遷し、統一の業は完成したのである。統一の成つたのは元より伊王エマヌエル二世の賢明と、カブール、ガリバルヂ、マッヂニ等三傑の努力に依るは無論であるが、ナポレオン三世の援に依る事も少く無い。帝も亦伊太利を助け、ニース、サボヤの兩地を得、大に名聲を輝かした。併しビラ・フランカの和約に於ては、伊國民の怒を招ぎ、列國の非難をも得たのである。

六　普墺戰役と其の講和

普魯西の雄圖　ウィーン會議の後、墺太利は獨逸聯邦中で勢殊に盛であつたが、其後普魯西は北獨逸諸國を連ねて關稅同盟を組織し、段々墺太利を壓する樣になつた。さて普王フリードリッヒ・ウィルヘルム四世は「二月革命」の際、主として憲法政治を布く事を主張されたが、不幸にして千八百五十七年以來、病の爲め政治に與る事が出來無い樣になつた。そこで皇弟ウィルヘルムが攝政となり、大政に與かり、千八百六十一年に普王の王位に卽き、ウィルヘルム一世と稱した。時に齡既に六十

餘であつたが、意氣は益々剛健で熟慮に富み、『帝王神權說』を信じ、良々もすると施政が專制に流れ、國民との衝突が避け得ぬ樣になつた。王は『小獨逸主義』に依り、墺を排して獨逸の統一を成さんが爲、軍備の擴張兵制の改革に志し、攝政たる頃から陸相ローンと計り、精細な軍備擴張案を作つて之を議會に提出し、又卽位後は軍備案につき重ねて審議を求めたのである。かくて上下兩院共に臨時軍費の支出を可決したものゝ、下院は二年現役案を行ふ可き事を政府に迫つた。然るに王は斷然之に反對で、千八百六十二年下院を解散し、改選の結果は政府反對の自由黨議員が多數を占めた。かくて同年九月オット・フオン・ビスマルクを擧げ首相兼外相となし、斷然軍備の擴張を遂げ樣としたのである。ビスマルクは千八百十五年の生れで、此折漸く四十七、英姿堂々、擧止輕快、眼光爛々として人を射、保守的政治家として非凡の性格を備へて居た。彼の說は王の說と同じく、小獨逸主義である。そして『之を行ふに鐵と血の力に依るべきである』と主張した。先づ王に勸めて出版の自由を抑へ、議會の論議を制し、斷然軍備の擴張を行つた。かく一方ビスマルクの樣な偉大な政治家があり、一方にはローンの樣な有名な陸相が居り、名將モルトケの如きは參謀長の地位を占め、段々國力の充實を計り、密に機運の熟するを俟つたのである。

普墺戰役の起因　兎に角普墺二國は獨逸の兩雄であつて、所謂兩雄併び立たず、衝突は早晩避け難いものであつた。千八百六十三年墺國が主宰となり、マイン河畔のフランクフルトに聯邦諸侯の會議を開き、聯邦の憲法に修正を加へようとしたが、普は之に參列せぬ。決議案は空しく無效に終つたのである。墺は之から深く普を惡んで居た。是れ戰の起れる第一因である。次にシュレスウィヒ、ホルスタイン問題は、二國を驅つて戰場に見えしむる樣にした。千八百四十八年丁抹王

クリスチヤン八世が死し、フレデリック七世が立ち、從來丁抹の支配の下に多少の自治權を有して居たシュレスウィヒ、ホルスタイン二公國は、丁抹から離れて、獨逸の聯邦に加はらうとし、聯邦に援を求めたのである。かくて普軍が主となつて、兵を出し、丁軍を打破つた。處が英國の如きは普の行動を惡んで丁に同情を寄せ、專ら和議の成立に力を致した。かくて千八百五十二年普、墺、英、露、丁瑞典の六國が倫敦に會し、二公國の權利を認めて丁抹に從はせ、フレデリック七世殂落後は、ゾンデルスブルク公クリスチヤンを丁抹及び二公國の王に決め樣とした。處が千八百六十三年クリスチヤン九世が立ち、前王の遺旨を奉じ、兩公國の一シュレスウィヒを全然丁抹に併せ樣とした。兩公國の民は大に怒つて、直ぐと援を獨逸聯邦に求めた。かくて翌年には普墺二國が同盟して丁軍を破り、丁をして兩公國を放棄させたのである。さて千八百六十五年普墺の二國がガスタインで會合

し、墺は主としてホルスタインの行政を、普はシュレスウィヒの行政を司る事に取り極めた。處が其の後墺は兩公國の相續問題を聯邦に問ひ、その上アウグステンブルク公の兩公國に對する相續權を議する爲、兩公國有志の會合をホルスタインで開いた。普は之を聞いて非常に怒り、墺を以てガスタイン條約を破れるものとし、戰勝の結果得た地方は、凡て自國に併すべきものであると唱へた。處が墺は兩公國を擧げ、アウグステンブルク公に與ふる旨を宣言した。是れ普墺が戰を開いた第二因である。畢竟二國は一般政治上聯邦内に併立が出來ぬので、二國の爭は方に死活の戰である。

普墺戰爭　ビスマルクは普墺の戰は早晩避け難いのを知つた故、千八百六十六年密にナポレオン三世と會合し、ライン河左岸の地を佛に與ふる事をほのめかし、將來の戰に中立を守るを誓はせた。其の後兩公國の處分問題が喧しかつた折、

伊と攻守同盟を結び、戰後伊にヴェニスを與ふる事を約した。一方墺は又バヴリヤ、ウェルテンベルヒ、ハノーヴァー、バーテン等、聯邦の殆ど大部を提げて普に當る事になつた。かくて千八百六十六年六月、普と伊とは墺に戰を宣したのである。普はモルトケ將軍の非凡な軍略で、三十二萬餘の大軍を動かし、其の二十七萬餘を本軍とし、太子フレデリック・ウィルヘルム之を率ゐ、墺の主力ベネデックの率ゐる二十四萬の軍に向つた。そしてシレシヤ、サクソニヤ兩道から進んだのである。其他四萬の別軍はハノーヴァー、ヘッセン、バヴリヤの方面から進んだ。普王ウィルヘルム一世は元帥として全軍を總理し、モルトケは參謀總長として帷幕の謀に參し、普軍はモルトケの軍略から精鋭な大兵と精巧な武器とを完備せる交通機關(鐵道)で南に送り、早くも墺軍の機先を制し、疾風の如く墺軍に迫つたのである。普の本軍はボヘミヤに亂入し、七月三日にはケーニヒグレーツ附近のサ

サドワの戰

(普王ウィルヘルム戰場に於て皇太子に勳章を授く)

ドワで墺軍を粉碎した。戰の始め普軍は十二萬餘、墺軍は二十萬餘を以て衝突したのであるが、其の後普軍は太子軍十萬餘の援助を得、忽ち墺軍に決戰的打擊を與へ、墺軍は一萬五千の死傷を殘して退いたのである。サドワの敗戰は表面ベネデック將軍の責任であるが、實は作戰計畫に於てウィーン政府の掣肘を受けた爲である。政治家が軍事に容喙した結果である。而しベネデックは敗戰の責を一身に負ひ決して他を咎めず、手記せる日記を燒いて沈默を守つたの

である。モルトケ嘗て曰へる樣、『我軍にして若しケーニヒグレーツに敗れたらば、予も亦ベネデックに學ばんのみ』と、英雄能く英雄の心を知ると謂ふ可きである。

普軍はプラーグ、プリュンを奪り、洪牙利、ウィーンを目指して進んだ。更にハノーヴァー方面でも勝を得たのである。獨り伊太利では墺軍が海陸共に大勝を得、陸ではクストッツア、海ではリサ島附近の海上に、何れも伊軍の敗北となつた。

プラーグの講和　併し本國での墺軍の敗北は、少からず國民を落膽させ、フランツ・ヨセフ帝は伊國での勝利を機會とし、佛帝ナポレオン三世に仲裁を賴んだ。ナポレオン三世は直ぐ樣休戰を雙方に申込んだが、普は『墺が豫定和約に同意するに於ては休戰すべし』と云ひ、遂に普の提案通り豫定和約を決議し、同年八月プラーグで確定和議を結び、戰は僅に七週間で止んだのである。かく決戰の機が速められたのは、一に兵器用兵術等の變遷にも依るけれど、一は交通が便利となつた結果、戰鬪材料の集中が容易になり、且つは經濟關係が緻密になつて、雙方共に決戰を急いだ結果に外ならぬのである。

此和議で、(イ)墺は獨逸聯邦の解散を認め、墺を除き新に獨逸を改造するに同意し、(ロ)シュレスウィヒ、ホルスタインに關する一切の權利を普に讓り、(ハ)墺は普に對し二千萬「ターレル」の償金を支拂ひ、(ニ)且つ墺はヴェニスを伊太利に割く事を約した。戰の動機の重大であつた丈、決議も可なり大袈裟である。

戰後普は墺を除き、ハノーヴァー、ヘッセン、ナッサウ等を併せ、所謂「北獨逸聯邦」を造つて其の盟主となり、遂に普王は新聯邦の元帥として、宣戰講和の大權を收むる樣になつた。

七　獨佛戰役と其の講和

獨佛戰役の原因　千八百五十四年ナポレオン三世はクリミヤ戰役に加はつて大に名聲を昂め、千八百五十九年にはサルヂニヤを援けて伊太利統一の基礎を造らせ、大に佛の名譽を發揚させたのである。併し外交上で彼の失敗とすべきものも少なくない。サルヂニヤを助けて墺に當つた際の如きは、帝の企て通り、伊に聯邦を起す事が出來なかつた。のみならずサルヂニヤを出し抜いて密に墺と和を結び、ニース、サボヤを奪つた如きは、普く諸邦の侮蔑を買ふたのである。更に普墺戰役の折、ビスマルクの甘言に籠絡され、徒に中立を守つて戰後に何等得る處なかつたのは、確に拭ふ可らざる汚辱である。かくてナポレオン三世の聲望は日に日に衰へ、政府攻擊の聲は次第に火の手を昂めて來た。ナポレオンは止むなく外征の光榮で一時國民の眼を惑はさねばならぬ。華々しき戰捷の餘榮で、佛蘭西國民の虛榮心を滿足させねばならぬ。處が國民は普の亡狀を惡み、之に報復を志す

折であるから、帝は機會さへあらば、之と戰はうとしたのである。是れ佛が普に事を構へた遠因の一つである。更に民望を恢復する手段として、ナポレオン三世は領土を擴張する方針を執つた。帝は伯林の駐在公使ベネデッチに訓令し、『普の宰相ビスマルクと會見し、ルクセンブルグ州購入に應諾を求めよ』と言送つた。同州は元獨逸聯邦の一で、千八百三十一年倫敦協約に依り蘭領となつたのである。北獨逸聯邦には加はらぬが、關稅同盟に加入した故、普の戍兵は常に其の要塞を守つて居た。ビスマルクは非凡な外交家だから、陽に佛の要求に應諾を與へ、陰には彼の計畫を破らうとしたのである。佛はビスマルクの內意を聞き、千八百六十七年蘭王ウィルヘルム三世に謀り、彼の兼領せるルクセンブルグの購買を求めた。此の折和蘭は財政に苦んで居た故、悅んで其の希望に應じようとした。されど國王の意見として一應普國政府の意見を糺す事になつた。此の說が普に傳はつたか

ら溜ら無い。國民の憤激は非常である。盛に購買問題に不滿を唱へ、ビスマルクも亦『此事に關しては、何等佛蘭西から交渉に接せぬ』と公言した。かくてビスマルクは一方佛蘭西に內諾を與へ、一方獨逸の國民を怒らせ、遂には蘭王の行動をも掣肘し、佛の企畫の裏を搔かうとしたのである。かくて千八百六十七年、倫敦協商に關せる諸國の意見として、購買計畫は止める事になつた。ナポレオンは又もやビスマルクに賣られたのを知り、大層怒つたが戰うまでの勇氣は無い。澁澁諸國の意見に同じたのである。次いで英、佛、普、墺、伊、露の六强國は倫敦で協商し、ルクセンブルグを中立國とし、普は此の地から撤兵する事になつた。佛の國民は益々普に恨を重ね、殊にナポレオン三世は二度と普魯西に賣られたから遺恨骨髓に徹し、機を見て彼に打擊を與へ、帝政に對する民心の離反を防がうとしたのである。是れ獨佛役を起した第二の遠因である。

次に獨佛戰役の近因ともなつたのは、西班牙王位繼承の問題である。西班牙ではイサベラ女王追放後、普王の一族ホーヘンツォレルン・シグマリングン家のレオポルドを迎ふる事になつた。レオポルドは此の事を普王に計り、要求を辭退しようとしたが、ビスマルクの勸めで之に應ずる事になつた。實に千八百七十年七月の事である。佛國民の怒は絕頂に達し、新聞紙は筆を揃へて普の行動を罵り、『ハプスブルク家が西班牙王を相續して暴政を施した樣に、普も亦其の一族に同國の王位を繼がせ、其の國土を奪ふのである』と云ふ樣になつた。此折佛の首相はオリビエーである。口に民權自由の說を唱へ、平和の中に立憲制を擴張しようとし、之に反して外相のグラモンは極端な主戰論者である。七月の四日グラモンは普國政府に牒し、『佛は普が其の一族を西班牙に王とし、我が名譽を危うするを忍ぶ事は出來ぬ。貴國政府は宜しくレオポルドに一旦許諾した王位を辭させねばならぬ。』

かくは申送つたのである。かくてレオポルドは外交の紛糾の益々大なるのを見、遂に七月十二日王位辭退の通牒を發した。此報を得て悅んだのは佛の外相グラモンである。然るに彼は折返し伯林駐劄公使ベネデッチに訓電し、更めて普王に迫り、今後同公子に再び西班牙の王位を望ませぬ樣誓ふことを求めた。普王ウィルヘルムは非常に怒り、七月十三日直に此の要求を退け、ビスマルクは直ぐと此の由各新聞紙に公表させた。佛のグラモン一派主戰論者の憤りは絕頂に達した。首相オリビエーは內閣を退き、ガンベッタ、チェール等平和論者の意見も用ゐられず、國民の輿論は遂う〳〵開戰に決し、七月十九日內閣は普に對し戰を宣した。西班牙相續問題はかくして戰亂破裂の近因をなしたのである。畢竟獨佛兩國は感情的にも經濟的にも衝突を來して居るので、政治上併立を許さぬ關係になつて居る。兩國の爭は國民として存立を爭ふたので、飽まで死活の爭である。

獨佛戰爭　千八百六十九年來、佛は使を墺伊二國に送り、普との戰起つた際、其の援を得る事を求めた。更に千八百七十年にはナポレオン三世から使をウィーンに出し、戰端の愈々開けた曉、墺は伊と共にバヴリヤに兵を進め、佛軍に力を併する事を願つた。併し千八百七十年宣戰の後も、尙ほ兩國の回答を得ぬ。佛は更めて使を送り其援を求めたが、墺は自ら兵を出す時は、佛に恨ある露の後を襲ふのを恐れ、飽まで武裝中立をやる事になつた。伊も亦國王エマヌエル二世の如きは、兎角佛の舊恩を思つて之を援けようとの望もあつたが、何せよ閣員の多數が反對である。彼等は『佛兵が羅馬に駐在する限り、其要求に從ふ事は出來ぬ』と言ひ張り、遂に中立を宣言し、他の諸國も引續いて中立を公布したのである。

普では早くも千八百六十八年頃から、モルトケ將軍の企畫せる緻密な策戰計畫がある。されば其の動員は直に成り、南獨逸の諸州も亦舊怨を捨てゝ馳せ加はり、

總軍八十五萬と註された。國王ウィルヘルムが元帥となり、モルトケが參謀總長で帷幕の裡に神算を運らした。先づスタインメッツ將軍の第一軍(六萬)、フレデリック・カール親王の第二軍(十九萬四千)、皇太子フレデリック・ウィルヘルム親王の第三軍(十三萬)を、猛然佛の國境に迫らせた。佛では之と反對である。外は外交の失錯から伊墺の援を得る事が出來ず、內は諸般の準備が整はず、動員も機を失し、僅に三十二萬の兵を集めたに過ぎぬ。併しナポレオン三世は親しく軍を閲し、ルブーフが參謀總長となり、バゼーヌ將軍に十五萬の兵を與へメッツに進ませ、マク・マホン將軍に十五萬の兵を授け、ストラスブルグの方面に向はせ、他に五萬の兵を裝はせ、ナンシーとシャロンの陣營に駐屯させた。更に佛の海軍は東海及び北海の邊から、獨逸を襲はうと云ふ意氣込であるし、獨逸も注意に注意を重ねて、之に備へたのである。

ナポレオン三世の降伏

斯くて普の第三軍はワイセンブルク、ウェルトにマク・マホンの大軍を破り、進んで之をシャロンの方面に壓し、別に一部隊を遣つてストラスブルグの要塞を圍ませた。第一軍と第二軍は頻りに進んで、バゼーヌ將軍の軍を破り、其の退路を塞いで、糧食乏しきメッツの要塞に追入れた。此折シャロンにあつたナポレオン三世は、マク・マホン將軍を促して共にメッツを援はうとし、却て普軍に包圍され、マク・マホンは傷を負うて戰ふ事が出來ず、皇帝諸共セダンの塞中に圍まれたのである。ナポレオンは事の成らざるを知り、九月二日殘兵八萬五千餘を提げて、敵軍に降つたのである。

此の敗報は直ぐ樣巴里に達し、人心の動搖は非常である。ファーブル、ガンベッタ等は、止む無く九月四日に帝政を廢し、共和の假政府を建て、『國防政府』と稱へ、トロシューを選んで大統領とし、ファーブルが外務の局に、ガンベッタが内務の局に

包圍軍パリの陷落を望んで祝杯を擧ぐ

當り、全市を擧げて國防に努むる事になつた。新に國務に當つた人々は、何れも開戰當時平和論を唱へた人々である。ファーブルは豫めビスマルクと會見し、休戰を求めたのであるが、ビスマルクはエルサス、ロレーヌの割讓を求めたから談判が成らなかつた。かくてセダンの陷るや、普軍は進んで巴里に迫り、九月十四日から包圍の策を講じたのである。その後ストラスブルグ、メッツの二要塞も相續いて降り、ガンベッタの巴里救援策も空しく水泡に終り、市は圍を受くる四箇月の後、糧

食兵器に乏しくなり、千八百七十一年一月遂に開城に決したのである。戰亂が近
近二年で落着を告げたのは、古代の戰と異なり、武器も精鋭に用兵術等も決戰
を早むる樣になり、戰鬪材料の集中にも利便が加はり、剩へ經濟上の關係から
決戰を急いだ結果である。

フランクフルトの和約　かくて佛蘭西ではチェールが新に選まれて行政長官とな
り、露帝を介しビスマルク伯に會見を求めた。ビスマルクも禮を厚うしてヴェル
サイユにチェールを迎へ、自ら和約の條件を提出し、エルサスの全部とロレーヌの
大部、外に六十億法の償金を求めた。チェールは頻にその要求の過重なのを訴へた
が、何うしても聽かれぬ。止む無く二月二十六日にヴェルサイユで假條約を結び、
五月の十日フランクフルトの和議にて之を確定した。チェール等の遺恨は綿々とし
て永く盡きぬであらう。

此の條約で、(イ)佛はエルサス、ロレーヌ(共に一部を除く)を普魯西に割き、
(ロ)償金五十億法を出す事を約した。無論大戰の決を定むる和約としては充分で
ある。此の當時普の威名は益々昂がり、南獨逸諸州も公然北獨逸聯邦に加入する樣
になり、統一の機運は愈々熟し、遂に千八百七十一年一月十八日、全獨逸の君主
ヴェルサイユの宮殿に集まり、普王ウィルヘルム一世は推されて、芽出度獨逸皇帝
になつたのである。

八　露土戰役と其の講和

アレクサンドル二世　露帝アレクサンドル二世は、クリミヤ戰役未だ終らず國步
極めて多難の折、卽位されたのである。されば戰後侵略の主義を捨て、國政改革、
民力休養に意を注がれ、言論の自由を許し、宗敎言語を統一し、更に千八百六十

一年には土地附きの農民を解放し、惡風の一洗に力を致された。併し其後に至り帝の心理は忽焉として一變し、再び專制武斷の治に復へり、外交上には侵略の主義を執る樣になつた。かくて千八百七十年普佛戰役の折、露の外相ゴルチャコフは單に一片の回狀もて、巴里條約に決められた黑海中立の要項を破棄した。以後露の東歐に於ける勢は隆々旭日の天に冲するの觀があつたのである。のみならず皇帝アレクサンドルは、當時行はれつゝあつた大スラヴ主義を利用し、バルカン半島等に於けるスラヴ諸族を統合し、其の勢力を發展させ、自ら全歐スラヴの盟主を以て一代の覇業を成さうとしたのである。

バルカンの紛亂露の活躍　當時バルカンなる土耳其ではアブヅル・アヂズ、皇帝の位に居り、行政が亂れ財政も整はず、其の上賢相ネジット・ウズマの死んでからは、皇帝は唯憚る處なく國帑を亂費し、重賦を課し、殊更非回教徒の臣民に對して凡

ゆる抑壓を擅にしたのである。

かくて千八百七十五年ヘルゼゴビナとボスニヤ（共にスラヴ族）とは、土耳其の暴政に堪へずして叛き、セルビヤ（スラヴ族）と黑山國（スラヴ族）も密に之と氣脈を通じた。そこで翌年正月大スラヴ主義の實現に任ずる露西亞は、英獨墺の三國を誘ひ、共に土國政府に忠告を試み、彼をして內政を改革させ、忠告に聽かぬ時は武力で以て之を弱め、スラヴ諸邦を自らに寄らせようとしたのである。土は果して之を聽かぬ、暴政は益々募る許である。スラヴ種のブルガリヤは一齊に叛いたが、土耳其もさるもの暴力で之を鎭め、叛徒一萬餘を殺した。次でサロニカでも土耳其人が暴發し、獨、佛兩國の領事を殺したのである。露は勿論佛、獨、墺、伊の列强も軍艦をサロニカ沖に集め、居留民の保護を名として盛んな示威を行うた。此の折、土耳其の弊制改革を以て任じた青年土耳其黨の領袖ミッドハト・パシ

アは、無能のアブヅル帝を廢し、弟のムラッド五世を立てたが、其の後之をも斥け、其の弟のアブヅル・ハミッド二世を立てた、新帝はミッドハト・パシアの勸で新に憲法を編み、千八百七十六年之を發布し、國會をも召集したのである。處が其の後皇帝の意が變り、憲法は中止する、自由平等の思想には迫害を加へる、非回教徒に對する横暴も愈々募る許であつた。之を見て喜んだのは露帝である。乃ち露國皇帝はバルカン、スラヴ族の救濟を口實にして、土耳其を擊ち、大スラヴ主義の實行をはからうとしたのである。之を機會に圖南の鵬翼を奮はうとしたのである。

かくて千八百七十年七月セルビヤと黑山國とは公然叛旗を擧げ、露の義勇軍も内々叛軍に投じて居た。併し土軍の鋭鋒には敵し兼ね、散々敗衂を重ねたのである。露を始め英、佛、獨、墺、伊の列强は共同の上、土軍を抑へ二箇月の休戰を行はせ、別に列國の使臣は君府に集まり、又もや改革案を提げて土耳其に迫り、今度は是非とも行はせようとしたのである。處が土の皇帝も機敏である、提議を俟たずに自分から憲法を發布し、公然列强の好意を辭はつて終つた。實に千八百七十七年の正月である。

此の際露は土を信ぜず、飽まで武力に訴へて多年の望を遂げ樣とした。併し戰備の完成を期するには多少の時日を要するから、其の間不用の交渉に種々な術策を弄したのである。此の目的でイグナチェフは西歐の諸國を訪ね、改めて土國の改革案を提議しようとした。先づ彼は英國に行き、倫敦駐劄の露國大使なるシュワロフ伯と議し、所謂『倫敦議定書』を作り、英國初め列强の贊助を得たのである。即ち此議定書では君府駐劄の列國公使に、土耳其の約せる改革案の實行を監督させ、土にして列强の望に應ぜぬ時は、土國内基督教徒の保護の爲め、列强間に協

議をなす事を約束した。該議定書は四月を以て土國政府に提出されたが、土は巴里條約に極められた土國獨立保全の主義に悖るとて、斷然拒絶の態度に出でたのである。

此の折露の戰備は既に出來た。露帝は『劍を以て吾人の要求を達せねばならぬ』と唱へ、直ぐと動員を完成し、軍は早くも長驅してプルートの河畔に進み、皇弟ニコラス・ニコライウイッチ大公が、軍司令官として全軍を督する事になつた。所謂ドナウ軍是である。次で四月の二十四日露は公然土耳其に宣戰したのである。露の口實は武力に訴へ、同人種同宗教のバルカン、スラヴを援け、土國に改革を強ひようと云ふのであるが、實は同人種を統合して、其の發展を計る大スラヴ主義の目的に出でたのである。されば此の戰の目的は經濟上精神上、露の權力をバルカン半島に張らうと云ふのであつて、一般政治上の戰爭である。併し土にとつて死活の戰なるは云ふまでも無い。

プレヴナの激戰　當時露土の間にルーマニヤ侯國と云ふのがあつた。人種は所謂ルーマニヤ人であつて、羅馬人の系統にゴート、フン等の血を混じたのである。兼ねてから露に心を寄せて居たが、此の折露と密約を結び、露軍は自由に其の國內を通過し、のみならずその郵便鐵道をも利用する事が出來る樣になつた。此の際露は又獨逸から好意中立の約束を得、墺にはボスニヤを與ふる約で傍觀の態度を執らせ、其の他佛蘭西は未だ戰後の疲から恢復せぬ故、之を憂へぬ。英國は露のバルカンに勢を得るのを喜ばぬが、獨力で干涉する元氣は無いと考へた。

露のドナウ軍と相應じて亞細亞側から進んだのは所謂カウカサス軍十五萬で、軍司令官はミカエル・ニコライウィッチ大公である。黑海の東岸を廻り、小亞細亞方面から君府に向ひて推寄せようとした。ドナウ軍で左翼の一軍團はドナウを渡

羅
馬
尼
亞
黑
海
イチステブ
トスレカブ
ヤリトスリン
ワクスブ
ワトスン
ブレヴナ
ヤンボリ
ルトブルヒ
ヤンブリ
ヤンブリ
ヤンブリ

併しオスマンの軍も新手を加へて五萬人、プレヴナの峻に據り塹濠を營み、敵軍引寄せ、一泡吹かせんと待構へた。かくて七月三十日、露軍は鋭を鼓して之を攻めたが、死傷相踵ぎ、驚く可き慘狀を呈した。露軍は止む無く軍を下げたのである。所謂第二回プレヴナの攻擊は是である。此の折オスマンが斷然攻勢を取り、ロム河畔の土軍も之に應じ、內外挾擊の策を執つたなら、ブルガリヤの露軍は恐らく決戰的の打擊を受けたであらう。

シプカ峠の戰　露のグウルコ將軍の率ゐた中軍の先鋒（ラデツキー將軍之を率ゐ）は、バルカン山南の占領地帶を引上げ、シプカの峠に退いた。時もあらせず土のスレーマン・パシアは烈しく推寄せ、一隊敗るれば又一隊を出し、息をもつかせず攻立てた。かくて八月二十日から二十三日まで夜を日についで攻擊せられ、露の將卒は何れも最後の忠誠を皇帝に捧げんとしたのである。併し運命は彼等を見捨

プレヴナの戰

（露帝アレキサンドル二世幕僚を率ゐて戰況を望見す）

てゐ。折善くも援軍至り、辛くも全軍の潰亂を見ず、無事にシプカの山道を保ち得たのである。スレーマンの軍は遂に峠の南なる村落に退却し、北ブルガリヤからの通路は依然露軍の手に握られて居た。

プレヴナの陷落　プレヴナの第二戰後、露軍は軍の集中を計り、黑海岸守備の二軍團、國內新募の若干軍團何れも之をブルガリヤに聚め、別にルーマニヤ公カールの助力を求めた。カールは新鋭の兵を率ゐて、プレヴナ攻圍軍の陣頭に立つたのである。九月

の始め露軍は又もや攻勢を執り、九月七日から十二日まで露帝親しく全軍を監し、將卒勇み立つて嶮に迫つた。此の戰にルーマニヤ軍は要塞の北側でグリヴィツアの角面堡を奪ひ、スコベレフ將軍も第一線を破つて奮進したものゝ、空しく土軍に撃退されたのである。所謂第三回のプレヴナ攻撃である。

一回から三回に渡るの攻撃は何れも露軍の敗北となつた。露の輿論は騒然として無能の幕僚を斥け有才の士を擧ぐ可きを唱へた。有名なセバストポールの守將で久しく不遇の地位に置かれたトートレーベンは、ブルガリヤに招かれ、プレヴナ攻撃の司令官に補せられた。彼は要塞の圍を密にして降し得ると知つたから、啻徒に攻立つる樣な事はせぬ。成るべく持久長圍の策を執らうとしたのである。かくて四週間を過ぎ、十月の中旬にはプレヴナは早、鐵の箍で圍まれた樣に、蟻の這ひづる隙も無かつたのである。

豪氣で經驗に富んで居る流石のオスマン・パシアも最早爲す可き手段が無い。土軍の運命は貯ふる糧食の量で極めらるゝ事になつた。其の後勇敢なスレーマン・パシアは再びシプカの占領を企てたが、矢張成功を見ずに終つたのである。十二月の中ばにはプレヴナの要塞で著しく糧食が乏しくなり、塞内の軍馬は殆んど食ひ盡され、兵士の食も平素の三分の一に減ぜられた。かくて勇敢なオスマンは止むなく最後の奮闘を覺悟し、十二月の十日殘りの糧食を將士に分ち、其の後西方に向つて勇敢な突撃を試みた。此の折黎明の濃霧が深く咫尺も辨ぜぬ程であつたから、露軍は敵の近寄るも知らず、霧晴るゝに及んで眼前敵兵の近づけるに驚いたのである。併し露の抵抗は案外にも頑固であつて、迫る土軍を打靡けた許りで無く、逃ぐる敵兵に追ひ縋り、土軍に向ひ激しい十字火を浴せかけた。オスマンも身に傷を負ひ、再び要塞に退かうとしたが、塞は何時しか露軍の爲に奪られて

居た。流石のオスマンも力盡き、殘兵四萬餘と共に露の軍門に降つたのである。最爾たる孤壘に據り全露の大敵を支へ、能く五ヶ月の苦戰にたへ、奮鬪力盡きて降つたのも、彼にして初めて能くすべきである。嘖々其の功を稱へらるゝも偶然では無い。

かくてバルカンは何時しか冬のさ中となつた。雪は眞白に半島の山々を蔽ひて、吹く風は膚を切る許であつた。併し露軍の勢は彌が上にも盛である。十二月の末プレヴナの西南に軍を集めたグウルコ將軍は山間の積雪を蹴りて進み、ソフィヤから土軍を擊退け、フィリポポリス幷にアドリヤノプル方面に肉迫した。明れば千八百七十八年正月、グウルコ將軍はスレーマンの軍を破り、アドリヤノプルを占領し、其の後數日露軍の先鋒は早くもマルモラ海岸のロドストに達した。

かく決戰の期の早められたのは、古代に異なり近代では戰爭に對する經濟關係も密になり、敵味方共に決戰を急ぎ、且つは戰鬪材料の蒐集等も容易になつた爲である。

サンステファノの和約　プレヴナ陷落後土國政府は力盡きて、列强の仲裁を求めた。のみならず亞細亞方面でもカルス、アルメニヤが侵略され、土の形勢は日に日に奮はず、セルビヤ、黑山國、希臘の如きも、頻りに土國を困めた。是等の事情は土をして愈々講和を急がせた所以である。土は更めて平和の周旋を英國の女皇に賴んだ。英國は直に電報で露國に向け、平和の締結に意あるか何うかを尋ねた。處が皇帝の答には、『露土の間に直接交渉を開くなら、平和の交渉に應ず可し』との事であつた。かくて一月十四日、土國の講和使はカサンリクなるニコラス大公の營に趣き、休戰を願ふたのである。かくて大公は漸く一月三十一日に、アドリヤノープルで休戰の要項を發表した。

英國は露土の開戰に先だち、『今後我國の利權が損せられぬ以上、飽くまで中立の態度を持せん、之に反し他國がスエズの運河を封鎖し、或は埃及にて軍事行動を執る如き際、之を默認する譯には行かぬ。更に君府の土國以外の國に占領さる場合も默するを得ぬ。又列强の贊助で極められたボスポロス、ダルダネル兩海峽通航の法則に變改を加へんとするものあらば、同樣反抗の態度を執らねばならぬ』と宣言した。之に對し露の宰相ゴルチャコフは『君府の獲得は吾人の望む所で無い。埃及での軍事行動も同樣である。但し戰爭の場合、君府の占領は吾人の取らねばならぬ手段である。』と公言した。さて露土の間に休戰の成らうとする際、英國では議會を開き、女皇は開院式の勅語で、『露土の交戰は幸ひ吾人の利權に害を及ぼさぬ。而も交戰の尙ほ繼續するに於ては、今後不慮の事より警戒手段を執るやも知れぬ、其の際、卿等議員の贊助を得ねばならぬ。』かくは宣はれたので

ある。蓋し當時英國の內閣では、露軍が皇帝の意に叛いて君府を獲得する無きかを憂へたのである。かくて一月二十三日英政府は、ベシカ灣碇泊の地中海艦隊司令官ホルンビー提督に命を傳へ、ダルダネル海峽から君府に向ふ準備をさせた。言ふまでも無く、露の君府獲得に備ふる爲と、露が土との講和に橫暴を奮ふのを牽制せんとしたのである。此折平和主義の外相デルビー卿は、亞府の休戰要項が未だ發表されぬに、軍事行動を執るは不穩であると唱へ、一旦辭職したものゝ、其の主張が納れられたから再び前職に就いた。其の後倫敦駐劄の露國大使シュワロフの通牒から亞府和約の要件は重大であつたのを知り、英國政府は議會に對し六百萬磅の軍事補助費を要求した。平和主義者は『英國中立の豫件が何等害されぬ今日、かゝる態度を執るは不可なり』と論じたが、其折しも君府駐劄の公使レヤードから電報があつて、『休戰に係らず露は君府に向つて進軍を續けて居る。土は仕方

なくマルモラ海岸のシリヴリヤを明け渡す樣になつた。露軍は方に君府を去る三十哩、土國最後の防禦線チャタルヂヤを取らうとして居る。土國政府の恐慌は非常である。』かくの如き旨を知らせて來た。之を聞いた英國全般の驚きは想像以外である。政府案反對のフォルスターも其の說を改め、軍事補助費の支出は何なく議會を通過したのである。ベシカ灣の艦隊は、本國の指令を俟つて君府に向ひ出發する事になつた。英の外相デルビー卿は『艦隊出發の命は決して戰の爲で無い、英國臣民の生命財產を保護するが爲である。』かく公言したが、露の宰相ゴルチャコフも、『露の君府に向ふは、廣く基督敎徒の生命財產を保護する爲である。併し英艦にしてボスポルスに顯はれんか、我が軍は人道の義務を果さむ爲め、君府を獲得せねばならぬ。』かくは揚言したのである。

かくて英露兩國は陰に其の戰の準備を整へ、英艦の砲門は方に其の裝塡を終り、露軍は海底の淺瀨に隙間も無く水雷を沈設し、露軍にしてガリポリの高丘に顯はれんか、英艦は方にボスポルスの亞細亞海岸に押寄せんとするの意氣込を示した。併し此の間マルモラの一角を閉ざした暗雲は次第に薄らぎ、千八百七十八年三月の三日、露土兩國の間に所謂サン・ステファノの和約の成立を見る樣になつた。サン・ステファノはマルモラ海岸の一寒村である。勿論その大體は一月三十一日の亞府休戰條約に基づくもので、其の要項は大凡次の如くである。

（イ）土耳其はセルビヤ、黑山國、ルーマニヤの獨立を認め、セルビヤ、黑山國の領土を擴ぐること。（ロ）ブルガリヤは土耳其の藩屬國として自治權を有し、基督敎的政府を立て、其の上民兵を置く事を許さる。（ハ）ブルガリヤの新領土は極めて廣大に限り歐洲土耳其の大部を占め、其の境界東はボルポルス海峽を去る六十哩弱の黑海岸のミヂヤから起り、更に西に向ひアドリヤノプルの北に達し、之か

ら南に向ひエーゲ海に出で、海岸に沿うてトラキヤのケルソネススに及ぶ。更に西行サロニカを殘し、アドリヤ海を去る五十哩内の地點に達し、アルバニヤの境に沿ひ新セルビヤ國の南境に至る。（ニ）ブルガリヤ公は國民から自由に選まれ、土國皇帝の承認を得ること、更に國内の行政はブルガリヤ聲望家の會議にて極めらる。又向ふ二年間國内に新制度を布く場合、露國委員の監督を受くる事。（ホ）民兵の編成終る迄、露兵五萬を置いて國内を守備さすること。（ヘ）ボスニヤとヘルゼゴヴィナでは千八百七十六年列强から土耳其に提出された改革を行はすると。但し露、墺、土三國の協議に依り多少の變更を行ふを得。（ト）クリート島では人民の希望を參酌して千八百六十八年所定の組織法を行ひ、エピルス、テッサリヤでは露皇帝の内諾を經て前同樣の法令を施す。（チ）土は露に對し、十四億留の償金を支拂ふ。併し其の中十一億留に代へ、歐洲のドブルヂヤ、亞細亞なるアルダ

ハン、カルス、バツウム等を露に割與すること。尙ほ露國はドブルヂヤをルーマニヤに與へ、別にルーマニヤからベッサラビヤを得ること。此のサン・ステファノ和約は豫定の和約なれども、實は確定條約にも異ならぬので、近代の大戰の終りを定むる頗る重要なものである。

千八百五十六年の巴里條約では、土耳其帝國の獨立保全の主義を定め、之を危うするものあらば、歐洲全般の利害に關するものと見做し、關係七强國は何れも此の問題に容喙する事が出來る、斯樣に定めたのである。サン・ステファノ和約は此の約束から見て甚だ不安定のものである。又此の和約の眼目とする處は、所謂バルカンに於ける大ブルガリヤ公國の建設であつて、歐洲土耳其の中、新に獨立を許されたものを差引き、殘の土地の半部を同公國とし、露は隱然其の保護者として、自己と同種族同宗教の此の國に臨まうとしたのである。實に露にとつての

大成功、大スラヴ主義の名譽と謂つて宜いのである。併し東歐に於て露の勢力の增加するのは、英國や墺國の喜ばぬ處である。必ずや反對の態度に出ねばならぬ。此の點から云うてもサン・ステファノ和約は、極めて安全なもので無いのである。

伯林の公會　波瀾曲折その妙を極むるのは實に外交の常である。サン・ステファノ和約から平和の光照り初めたも束の間で、玆に又もや大いな紛擾を捲き起す事になつた。土耳其の獨立保全を認めた巴里條約の決議から見たなら、サン・ステファノ和約は確に穩ならぬものである。露土を除く他の五つの强國は、土耳其問題卽ち歐洲問題の意味から、此の約定に容喙する權利がある。元來露の南下を悅ばぬ英國は、此の理由から同和約に故障を云ひ立て、墺太利も贊成し、列國會議にかけ此の問題を極め樣としたのである。併し露は和約の中で歐洲全般の利害に關

せぬものは、列强會議で極める必要が無い。その必要があるもの丈會議にかけ樣と唱へたのである。處が英は此の意に反き、飽まで和約の全部を列國の會議で極め樣としたのである。畢竟露國で會議にかくるものを取捨する權ありとせば、歐洲全般の利害に關するものでも便宜除外する樣になるからである。かくて英露二國の關係は日增しに切迫し、方に砲火の間に見えんとする樣になつた。英の宰相ビーコンスフィールド(千八百七十六年ヂスレーリを以て、ビーコンスフィールド伯に任じたのである)は、密に戰備を修め、平和主義の外相デルビーは職を止め、主戰派のソールスベリー侯が之に代つた。侯は四月一日回章を列國駐劄の英國公使に遣り、サン・ステファノ和約全部を議題とせぬ以上、列國公會の目的を遂ぐる譯に行かぬと主張した。

此の折倫敦に來て居た露國大使シュワロフ伯は、一先本國に立還り、英國輿論の

有樣を奏上し、切に平和の解決を願ふた。加之露の國内でも虚無黨の勃興があり、獨逸の宰相ビスマルクも得意の外交で、平和の調停を計つたから、露帝も遂に英國に一歩を讓り、列國會議でサン・ステファノ和約全部を審議する事になつた。勿論英露二國は會議に先ち、在倫敦の露國大使シュワロフと英の外相ソールスベリーとの間に大體の取極をしたのである。即ち、(イ)新ブルガリヤ國を前和約所定の三分の一に縮め、其西南の一部を割いて土耳其の主權の下にある東羅馬亞州とする事。(ロ)英は露の亞細亞土耳其要地の占領を認め、其の代り英は土と同盟條約を結ぶ事にしたのである。斯くて六月四日英土條約が結ばれ、(イ)將來露がバツウム、アルダハン、カルス以外のアルメニヤで新に土地を略取せば、英は土を助けて露に當る事。(ロ)土國皇帝は其の報酬としてキプルス島の守備權、行政權を英國に與ふる。大凡斯くの如き規約であつた。

さて千八百七十八年六月の十三日から、有名な伯林會議は伯林なるビスマルク邸宅で開かれた。會議の議長はビスマルクである。英國では首相ビーコンスフィールド及び外相のソールスベリー、露西亞は首相ゴルチヤコフ、大使シュワロフ、墺は外相アンドラシー、佛は大使ワッヂングトン、伊は大使コルチ、土は大使メヘメッド・アリ・バシア、其の他希臘、ルーマニヤ、セルビヤ、黑山國も夫々全權使臣を派したのである。かく列國の俊傑が一堂の下に會したのは、眞に未曾有の壯觀と云うて宜いのである。

會議の大要は極めて平穩に解決されたが、細部の點では激しき論爭を重ねたのである。卽ちブルガリヤ問題では英露二國の論爭が容易に極まらぬ。露の全權ゴルチヤコフは已に地圖を卷いて議場を出ようとし、英の全權ビーコンスフィールドも臨時車を命じて國に歸らうとまでしたのである。併し此の折獨逸の宰相ビスマ

ルクは、英國を助け露國を抑へようとしたもの、一方では談判の破裂を防ぐ事に少なからず努力をした。かくて會議は漸く七月十三日に終り、その日の中に列國の調印を得たのである。今次に條約の大綱を擧ぐる事にする。

（イ）ブルガリヤには土國皇帝の主權の下に自治制を行はせ、且つ基督教的の政府を立て民兵を有たしむる。（ロ）ブルガリヤの領土をドナウ河とバルカン山との間に限り、サン・ステファノ和約に定めた大ブルガリヤ國の中バルカン山南の地を割き、東羅馬亞州を造り、內政では自治を許すが、其他の政治上と軍事上とでは、直接土耳其の支配を受けさする事。（ハ）ブルガリヤの名族會議は舊都トルノワーに開かれ、ブルガリヤ藩主を選み、後に列强の承認を得ること。但し現に歐洲の强國で統治を行ふ君家の一族を選むことは許されぬ。（ニ）土耳其に對するブルガリヤの貢金は伯林條約締盟諸國の同意を得て定むる。（ホ）土耳其兵はブルガリヤ

から引上げ、露兵も九箇月以內に同地から撤兵する。（ヘ）東羅馬亞州の知事は、土國政府が列國の贊成を得て任命する、露兵は九箇月以內に同地から撤兵する。（ト）ボスニヤとヘルゼゴヴィナでは、其の衞戍行政の兩權を墺太利に託する事にする。（チ）黑山國は獨立の公國として、土耳其幷にこれまで其の獨立を認めざりし締盟各國から承認さるゝ事。尙ほアンチヴァリ幷に其の沿岸を同國に與ふる事。（リ）セルビヤは締盟各國から獨立の王國たるを認められ、且つ若干の增地を得。（ヌ）ルーマニヤは締盟各國から獨立の王國たるを認めらる、同國內にある露兵は、一箇年內に撤兵する事。（ル）露はルーマニヤ人の多く

住せるベッサラビヤをルーマニヤから奪ひ、ブルガリヤ人等の多く住めるドブルヂヤの一部をルーマニヤに與ふる。（ヲ）露は亞細亞で前和約に得た土地の中一部を土耳其に還附する事。（ワ）希臘は土耳其からテッサリヤとエピルスの一部を得る事。（カ）土耳其幷にバルカン半島での獨立諸邦は宗教の差違から人民の政治上の待遇に區別を置かぬ事。締結された條項は大概右の如くであるが、この條約はその翌月を以て正式批准の交換を經たのである。

此の條約の折獨逸は墺太利に露西亞を抑へさする計畫があつたから、自分から要求する處は無い、寧ろ墺國に利を與へんとしたのである。墺がボスニヤ、ヘルゼゴヴィナで衞戍行政の兩權を得た如きは、固よりビスマルクの望む處であつた。彼の政策ではかくして墺の注意を南に向はせ、且つはゲルマン種族の統一發展を計る大ゲルマン主義の先驅となし、バルカン、スラヴの統一發展に意を注げる露

西亞と角逐させ、獨逸自らは中原に安泰を得、其の間に國力の發達を計らうとしたのである。

英國は伯林會議の結果では無いが、此の折柄キプルス島を占領し、地中海の東邊に威を奮ひ、亞細亞に對する商路を扼して居た。露は此の條約でベッサラビヤ及び亞細亞土耳其の一部を取り、其の上ブルガリヤに對し保護者の實權を收め得たものの、前のサン・ステファノ和約に比ぶれば其の利益は大に減殺されて居る。露が先に切に望んだ大ブルガリヤは、今度の條約で其の一部を削れて終ひ、前和約で露に讓られた亞細亞土耳其の一部は今度の條約で土に還す事になり、更に今度の條約でボスニヤ、ヘルゼゴヴィナ二州の衞戍行政權は墺太利の手に歸し、グルマン族の政治的利權は、次第に南バルカンの地に及ばうとしたのである。露の政治家の希望せる大スラヴ主義は、茲に其の一頓挫を來したのである。

伯林公會の後、大スラヴ主義の父と言はるゝ露のアクサコフは、『伯林條約は吾人に與ふるに勝利の榮冠を以てせぬ、痴者の用ゐる帽子と鈴を與へたり』と怒り、プレヴナ役の英雄大スラヴ主義の權化なるスコベレフ將軍は、『余輩スラヴ族は、外人陰謀の犧牲となつた、外人とは外ならぬゲルマン族である、吾人は終生恨を忘るゝを得ぬ、ゲルマンは我等の敵である、ゲルマンとスラヴとの戰は避け得ぬのである。その戰たる久しく慘虐に且つ戰慄すべきものであらう、併し最後の勝利は吾人スラヴにあらねばならぬ。』と、かくは大喝したのである。かくて後大スラヴ主義と大ゲルマン主義とは、精神的に經濟的に常に近東で其の衝突を來し、未來の禍亂を釀しつゝあつたのである。

九　日清日露兩戰役と其の講和

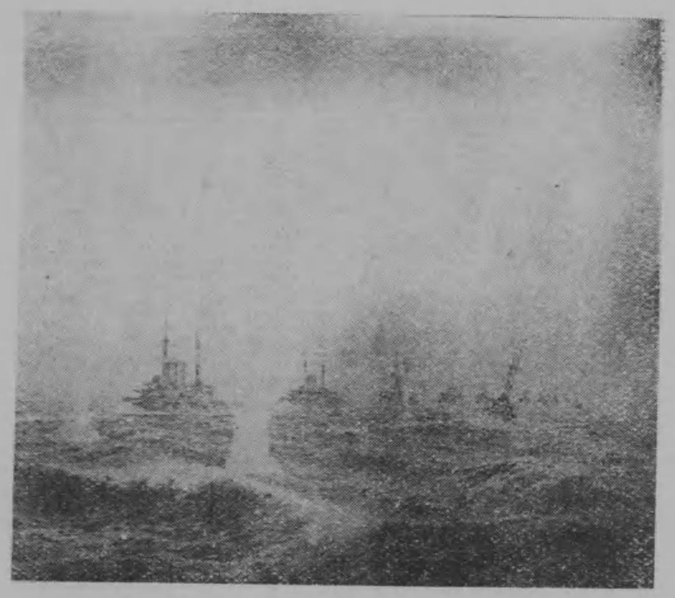
日清戰役　日本は千八百五十四年の開港以來、國勢が駸々として進み、臺灣を征し朝鮮に威を展べ、漸く列國の注目する處となつた。千八百八十四年には清兵が朝鮮の事大黨を援けて獨立黨を破り、日本の公使館も燒かれたのである。我國は直ぐ樣大使を出して其の罪を糺し、彼をして償金を出させ、別に伊藤博文を清國に派し、有名な天津條約を取極めさせた。之から日清兩國は互に朝鮮に止めた兵を引上げ、更に將來半島に事起りて、兩國一方から兵を朝鮮に出す時は、互に行文で知照し、事定まつてから直ぐ撤兵する事を盟つた。これから日清兩國は朝鮮に對し同一の權利を有する事が明かになつたのである。其の後朝鮮で西敎を斥け、東學を起さうと云ふ保守的學者の團體が兵を擧げ、政府に怨あるものも之に結んだ。所謂東學黨である。韓廷は之を鎭むる力が無い、止むなく清國の援を藉りて之を平げ樣とした。そこで清國は兵を朝鮮に出し、我國も兵を送り且つ清國に勸

め兩國力を併せて朝鮮內亂の源を絶たうとした。處が清廷は我の提議に從はぬ、飽まで天津條約の主旨を無視し、朝鮮は清の屬邦であるから、その改革に日本の援を借りぬとの事であつた。かくて我國は千八百九十四年八月清國に戰を宣し、海陸兩方面から清國を攻立てた。此の戰は朝鮮方面に於ける日清兩國の政治上の衝突であるが、一方互に東洋で其の存立を爭ふた所謂兩國民の死活戰である。

陸軍は先づ成歡、牙山を拔き、平壤の清兵を退け、進んで遼東半島に打入り、海軍は清の北洋艦隊を黃海に破り、殘艦を威海衞に殲し、海陸相應じて北京に迫らうと云ふ形勢を示した。かく決戰の期が速められたのは、毎々云ふ通り近代では古代と異なり、戰鬪材料の集中が容易になり、用兵術兵器等も進歩して決戰を速め得る樣になり、その上戰と經濟との關係が愈々緻密に、雙方共に決戰を急ぐ樣になつたからである。

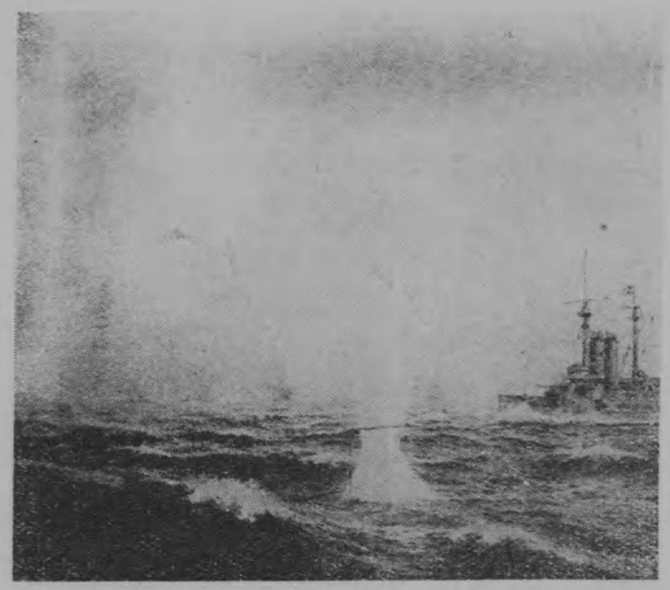
かくて千八百九十五年四月下ノ關條約となり、所謂重大戰役の結果を定むる條約とて、規模も可なり大きくあつた。卽ち清は朝鮮の獨立國たるを認め、更に償金二億兩を出し、臺灣と遼東半島とを割き、其の上沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を解放する樣になつた。處が此の條約の成らうとする時、露は日本に遼東を占められては、太平洋に發展する事が出來ぬから、己れに親しき佛蘭西や露の鋒先を東に向け樣とする獨逸と結び、遼東割讓に就ての異議を提出した。日本も遂に其の要求を納れ、代償金三千萬兩と引換に遼東半島を清國に還附したのである。

日露戰役　清は戰に敗れた結果、其の缺點を世界に暴露し、列强は續々種々な强請を提出し、獨は膠州灣を、露は旅順及び大連を、英は威海衞を、佛は廣州灣を、何れもこれを清から租借し、清國に於ける外人排斥の念は段々昂まり、遂に千九



日本海の大海戰（其一）

百年所謂義和團匪の亂となつた。そこで日、英、米、露、佛、獨等の聯合軍は北京を占領し、各々自國の公使館を救ひ、清國は止むなく四億五千萬兩の償金を出し漸く和議を調ふる事が出來た。實に千九百一年の九月である。此の折露は鐵道保護を名として滿洲を占領し、團匪の亂が終つても尙ほ撤兵を行はぬ、次第に清を脅かし東洋の平和に害ある新條約を結ばうと



日本海の大海戰（其二）

した。此の時日本と英國との利害は互に一致して居た故、兩國は清韓保全東洋平和の目的から攻守同盟を結んだ。所謂千九百二年の日英同盟である。此同盟は陰に露國を目指して居る故、彼も內心恐を懷き滿洲撤兵を約したのである。併し其の後彼はその宣言を履行せぬ、加之韓の北邊を脅かし、其の主權を侵し、我が商工業の優先權をも害する樣になつた。かくて

我國は露に對し、屢々友誼的交渉を重ねたが、少しも其效が見えぬ。滿洲朝鮮にして彼の手に入らば、東洋の平和は害され、我が安全は危うさるるのである。日本は遂に千九百四年二月を以て戰を宣した。此の戰爭は前にも云ふ通り日本は此の一戰で日本の政治上の將來、國民的將來を極め樣としたので、此の戰は方に國民の存亡を賭する死活戰である。併し露にとつては單に政治上一小部分の爲に爭ふたので、此の戰は國民的の性質を表はさぬ、所謂一般政治上の戰に過ぎぬのである。先づ陸海軍は海に陸に敵を屠り、陸には遼陽奉天の大戰を以て決戰の勝利を得、海には日本海の大捷を以て彼の艦隊を殲滅させ、同じく決戰的勝利を得たのである。宣戰以來僅に十有六月、かく古代の戰に比し、決戰の期の速いのは毎々云ふ通り戰に對する經濟關係が密接となり、或は戰鬪材料の集中が容易になつた結果等に依るのである。かくて千九百五年九月日露兩

國間に、所謂「ポーツマス」和約の成立を見る樣になつた。此の折平和の恢復に周旋したのは亞米利加合衆國大統領ローズベルトであつたのは誰人も知る如くである。宣戰の目的が重大なだけ講和の條項は何れも重要である、即ち此の條約で露は韓に對する日本の宗主權を認め、更に清國から受けた彼の遼東半島の租借權、長春旅順口間の鐵道、樺太の南半をも我に與へた。我國は斯くの如くして漸く列國の畏敬する處となり、世界の强國にも伍する樣になつたのである。

一〇　バルカン戰役と其の講和

第一バルカンの役　千九百十二年バルカンなるアルバニヤの反亂から惹いて青年土耳其黨内閣の瓦解となり、伊國との講和は未だ締結されず、内外極めて多事であつた。此の際近く獨立して意氣の昂れるブルガリヤは勿論、セルビヤ、黑山國、

希臘等に至るまで、此の機を利用し、衰へ果てた土國を攻め、一は多年の宿怨に報い、一は土の領土を奪ひ、國威を張らうとした。此の時バルカン半島で頻りに暗中飛躍をやつたのは露西亞である。露の前外相イヅウォリスキーは、墺國の二州併合事件で失敗した後、大スラヴ主義を眞向に振翳し、バルカン諸邦の同盟を造つて土耳其を抑へ、ゲルマン族の南下に備へ、多年の恨に報いようとしたが、捗々しき成功を得なかつた。其の後ブルガリヤでは親墺派衰へ、親露派が勢を得、一露の指導を仰ぐ樣になり、セルビヤも亦大スラヴ主義の先鋒として墺國土國に向はうとして居る。露の躍起黨は此の機を失はず、スラヴ種の國なるセルビヤ、ブルガリヤ、黑山國を連ね、排土の思想盛んな希臘をも加へ、一は獨墺の親友なる土耳其を抑へ、其の領土を割き、一はゲルマン族の南下を止め、大ゲルマン主義の發展を妨げ樣としたのである。又バルカンの四邦も喜んで其の議に應じたの

である。

かくて千九百十二年の八月、ブルガリヤの國境マケドニヤ州なるコッシャナで、正教派ブルガリヤ人二百名が土耳其人(回教)に慘殺された。ブルガリヤの人心は非常な激昂である。否なブルガリヤ人は擧兵の口實を得て悅んだのである。又土國政府はマケドニヤのサロニカを經て、セルビヤに輸入しやうと云ふ兵器彈藥を抑留したから、セルビヤの人心も土耳其に反對する樣になつた。實は都合善き擧兵の口實を得て悅んだのである。之と前後して土國の砲臺が希臘の汽船を砲擊し、且つ希臘族も少なからぬマケドニヤが始終穩で無いから、希臘は之を口實に兵を擧げようとした。黑山國は屢々紛爭の起るのを防ぐ爲め、土領アルバニヤの一部を自國に加へようとしたが、土國が之に應ぜぬ故、國境問題を口實に兵を擧げ樣としたのである。

併しブルガリヤ、セルビヤ、希臘の口實は差當り土に迫り、マケドニヤの改革を行はすると云ふのであつた。弊政を正さしむると云ふのであつた。埃洪國外相ベルヒトルドは、事態の容易で無いのを見、八月十四日土國に對する勸告案を作つて列强の同意を求めた。卽ち土國政府に勸めて地方分權策を行はせ、國内の平和と秩序を維持さすると云ふのであつた。此の議に對しては露西亞が異論を唱へたのである。又かくの如き事情であるから土國政府も憂を懷き、列强の提議に先だち地方行政の改良案を出し、自ら機先を制せんとしたのである。而もバルカンの諸邦では土國政府の言明は信ずる事が出來ぬとて、密に戰備を止めなかつた。斯て平和を好める露の外相サゾノフは英佛の二國と協議し、一提案を作り、佛國首相ポアンカレーの名で列國に提議した。所謂ポアンカレー案である。此の案は土國をして伯林條約の規程に依り、列强監督の下にマケドニヤの自治政を行はせ、

露墺兩國は列强の委任に依り、バルカン四國（ブルガリヤ、セルビヤ、黑山國、希臘）をして戰を差控へさする事、萬一四國が土國と開戰するも、勝敗の如何に依らず領土の變更を許さゞる等是である。かくて此の案に多少の修正を加へた後、英、佛、露、獨、墺の名義で土耳其及びバルカン諸邦に提出さるゝ事になつた。併しブルガリヤ以下のバルカン四國の眞意は、マケドニヤの行政改革或は自治案等で無い、土國との開戰と領土擴張とが主なる其の目的である。されば殊更ポアンカレー案の提出に先だち、黑山國をして逸速く土に宣戰させた。時は十月八日である。宣戰の口實は國境問題未解決の爲と云ふのであつた。

續いて列强の提案は土國幷にバルカン四邦に傳へられたが、ブルガリヤ、セルビヤ、希臘の三國は、之に應ぜぬ、宣戰した黑山國の應ぜぬのは無論である。ブルガリヤ以下の三國は、聯合の要求書を土に送り、『歐洲諸强の威力は我三國の希

望を充すべき内政改良、特にマケドニヤの改革を土國に實行さするものとは認めぬ。又自治制度の約束に關する土國政府の誠意も疑はねばならぬ。寧ろ吾人は直接土國に談判し、土國内各民族の居住地を何れも完全な自治の地方とし、自由教育制度を立て、地方會議を起し各民族から其の議員を選ませ、列强監視の下に是等改革を行はせ、最後の解決を見ねばならぬと通牒した。土國政府は斷然此の提議を退け、其の上列强の勸告をも謝絶し、十月十七日を以てブルガリヤ以下四國に對し宣戰した。ブルガリヤ、セルビヤ、希臘の三國は、前から此の間の事情を知る故、殊更己等の意にあらぬ自治案を提出して土國政府に否定させ、之を口實に同日戰を宣したのである。事はバルカン四國の希望通りに運んだと云うて宜い。畢竟此の戰は土とバルカン四國の精神上經濟上の衝突から起つたので、互に國民の存立を爭ふたのであるから、雙方死活の戰と云うて宜いのである。

黑山國(モンテネグロ)は十月の半ばスクタリ港を目指して進み、勇敢無比なセルビヤ軍は、『ヅーシャン王』の軍歌(ヅーシャン王はセルビヤに於ける古代の名君で且つ非凡の英傑である)を奏し、『コソヴォ・ポリエの慘狀を記せよ』(コソヴォ・ポリエの役はセルビヤ軍がオスマン土耳其に破られた戰である)の叫を以て、オスマン土耳其の舊敵に迫つた。かくて十月二十八日には土耳其を破つて、マケドニヤのウスクブを奪ひ、云ふ許りなき悅を得たのである。地は十四世紀頃、ヅーシャン王の都であつて、今尙ほマケドニヤの要地である。此の役セルビヤの皇太子は自ら陣頭に立ちて軍を指揮し、烈しき白兵戰の後土軍を潰亂させた。是より先ブルガリヤ軍はキルク・キリセを取り、アドリヤノプルを圍み、十一月の初にはチャタルヂヤの線に迫つた。南方希臘軍は十月クリート島の合併を斷行し、十一月マケドニヤのサロニカに迫り、遂に一萬五千の土耳其軍は戰はずに歸服し、希臘の皇太子ジョルジ

親王は威風堂々サロニカ城に入城式を擧げられた。かくて土軍は連戰皆敗れ、宣戰後一ケ月歐洲ではアドリヤノプル附近の一郭と、二十五萬平方哩の狹少な領土を有する許りとなつた。かく速に決戰の期を早めたのは前にも云ふ如く、今日の戰は古代のものに異なり、戰に對する經濟關係が密接となり、或は戰鬪材料の集中が容易になつた結果等に依るのである。

其の後土耳其と聯合軍との休戰條約も成立ち、十二月十三日から倫敦で講和會議を開く事になつた。固より英國政府の提議に依るのである。さて豫定から後る三日、十二月十六日から英京倫敦聖ジェームス宮に講和會議が開かれた。勿論英國外相グレー、幷に列强大使調停の下に開かれた同盟四國對土耳其の會議である。此の會議は重大な戰役の局を定むるものとて、講和の談判も容易でない。一時は同盟國の提出條件と土耳其の承認意見の間に、大きな隔りがあつた故、協商は暫

し行惱みとなつた。併し種々交渉を重ねた結果、翌年五月三十日所謂倫敦講和條約の締結となつたのである。(イ)土國皇帝はエーゲ海岸のエノスから、黑海岸のミヂアに至る劃線の西方なる土領全部を同盟四國に與ふ。但しアルバニヤを除く。(ロ)アルバニヤに關する問題の凡ての決定は、英、佛、露、伊、獨、墺六國の主權者に一任す。(ハ)土耳其はクリート島に於ける主權を拋棄す。主要の條項は大凡斯くの如くであつた。所謂第一次バルカン役は斯くして終りを告げたのである。

第二バルカンの役　第一次バルカン役が終つて間も無くバルカンの同盟四國、卽ちブルガリヤ、セルビヤ、黑山國、希臘の間に、新占領地分割に就て爭が起つた。元來新に四國の手に渡つたマケドニヤでは、ブルガリヤ、セルビヤ、希臘三國の利害が一致せぬ。處が千九百十二年に結ばれた三國加入の密約には、戰勝後に於ける占領地分配に就ての規定がある。之に依ればセルビヤが現にマケドニヤで占領す

黑山國王・土耳古の半月旗を奪つて凱旋す

る一地方は明かにブルガリヤ領なるべきものである。ブルガリヤは早速その引渡をセルビヤに求めた。處がセルビヤは同地占領の折、少しもブルガリヤの力を借りず、却つてアドリヤノプルの攻撃にブルガリヤを助けた

から、此の地は飽までセルビヤ領にしたいと言ひ張つた。兩國の人心は之が爲に激したのである。此の際希臘も亦前約に依り、サロニカ及び其の附近の地をブルガリヤに遣るのを望まぬ、セルビヤと歩調を共にする樣になつた。勿論黑山國は昔からの關係上飽までセルビヤの與國である。此の際、英、露、佛殊に露國は熱心仲裁を遣つたが、ブルガリヤの軍人派は中々之に從はぬ。ブルガリヤの北なるルーマニヤ王國は、前役に中立の態度をとつたが、ブルガリヤは今バルカンに覇を稱へようと云ふ有樣であるから、勢力平均の上から云うて默し得ぬ樣な工合になつた。止むを得ずんばブルガリヤの背面を衝かんとしたのである。此の折塡洪國はブルガリヤを弱むるを望まぬ、ブルガリヤはバルカン、スラヴ中唯一の塡洪國の味方である、塡洪國は之を以て大スラヴ主義の選手たるセルビヤを抑へようと云ふのである。併しルーマニヤ（親塡の國）は之にも關せず飽までブルガリヤを

攻め樣とした。從つてセルビヤ、希臘の態度も俄に强硬となり、七月四日希臘は先づブルガリヤに戰を宣し、セルビヤ、黑山國も之に倣うた。ルーマニヤも兵を出してブルガリヤを壓し、土耳其も此の機を利用してブルガリヤを攻め、舊領の一部を恢復しようとした。第二バルカン役はかくして茲に開けたのである。バルカン諸邦で或る種の政治的利權を得んとする爭が、かゝる紛亂を釀したのである。

ブルガリヤ軍は至る處に敗れ、ルーマニヤの軍はブルガリヤのソフィヤ附近に兵を入れ、土軍もアドリヤノプルを恢復した。月を超えて早くも戰は決されたのである。かく決戰の期が速められたは前にも云ふ如く經濟的用兵術的の關係等にも依るけれど、又雙方の勢力に可なりの相違があつた爲である。ブルガリヤは遂に希臘、セルビヤ、黑山國、ルーマニヤの四國に和を請ひ、千九百十三年八月の

所謂ブカレストの和議となつた。ブカレストはルーマニヤの首府である。無論講和の內容は宣戰の理由に解決を與へんとするのである。此の條約でブルガリヤから希臘、セルビヤ、ルーマニヤに地を割き、且つクリート島に對する一切の要求を希臘に讓つた。その翌月君府で開かれた土勃二國の協商でブルガリヤは前役に占領した土地の一部を土耳其に還へした。

ブカレスト和議の際、墺洪國は成る可くセルビヤの增地を少くし、ブルガリヤの地位を動かさぬを願ひ、此の條約がバルカンの均衡を亂す場合、斷然改訂を迫る旨を宣言した。元來大スラヴ主義の先導たるセルビヤの勢を得るのは、墺洪國の心密に恐るゝ處、ブルガリヤの力を弱

めず之が牽制に當らせ樣としたのである。墺洪國は遂に條約の改訂を迫つたが、講和會議の議長なるルーマニヤ首相マヨレスケは之に應ぜぬ、斷然異議を斥けて終つた。墺洪國の第二バルカン役にルーマニヤの出兵を悅ばず、ルーマニヤの主宰にかゝるブカレスト條約を妨げ樣としたのは、著しくルーマニヤの反感を得たのである。ルーマニヤは再び墺を離れて露に近づく樣になり、講和會議の成功から、隱然バルカンの覇者たる地位を有せんとするに至つたのである。

戰爭と講和の歷史 終

戰爭と講和の歷史
定價金貳拾錢

大正三年十二月五日印刷
大正三年十二月八日發行

著作者　齋藤清太郎

發行者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　富山房

代表者　同所　合資會社富山房社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　笠間音次

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京神田　合資會社　富山房　（明治二十九年六月設立）　電本、一〇三六、四一三〇番

著作權所有

時事叢書

毎月數冊發行　口繪及カツトヤ入

世界の大戰は期せずして一齊に吾人國民の眼を世界に向つて開かしめ。苟くも日夕に變轉する世界の大事件に對し、豐富なる知識と明確なる理解とを有するに非ずんば一日も安居すること堪へざらんとする狀勢とはなれり。時々刻々急轉變化する世界日新の事實に對し、最も平易にして明快なる解決の資料を得んと欲せば「時事叢書」を讀め、座がらにして當代の專門家の時事問題に對する通俗にして同時に權威ある講說を開かん、と欲せば「時事叢書」を讀め。流麗の文章、珍貴の繪畫、趣味と實益とを兼ねたる國民座有のエンサイクロペヂアとして、家庭の讀物として、永く新時代の寵兒たるものは、實に「時事叢書」なり。

第一編　文學士保科孝一先生著　伯林と巴里

第二編　理學博士遠藤吉三郎先生著　歐洲文明の沒落

第三編　慶大教授田中萃一郎先生著　世界大戰の中心人物

第四編　法學博士長岡春一先生著　白耳義及白耳義人

第五編　文學士齋藤文藏先生著　ビスマルクと獨逸帝國の建設

時事叢書

定價金二十錢均一　郵稅內地四錢

第六編　文學士片山孤村先生著　獨逸及獨逸人

第七編　文學博士坪井九馬三先生著　墺匈國及其皇室

第八編　獨逸ベルンハルヂー將軍原著　富山房篇輯局譯　獨逸と次の戰爭

第九編　文學士煙山專太郎先生著　獨逸皇帝

第十編　文學士阿部秀助先生著　獨逸對列強の抗爭

第十一編　文學士內ヶ崎作三郎先生著　英國及英國人

第十二編　慶大教授林毅陸先生著　三國同盟と三國協商

第十三編　陸軍教授昇曙夢先生譯　戰爭と世界の終局

第十四編　文學士時野谷常三郎先生著　戰爭と講和の歷史

355
1

東京富山房發行

歐洲伏魔殿の新解剖

巴爾幹の變遷

ドクトル、ヴィロソフィー　長瀨鳳輔先生　文學士　內藤智秀先生　合著

菊判四百餘頁　定價壹圓六拾錢　郵稅內地八錢

巴爾幹半島は由來歐洲の伏魔殿と呼ばれ、或は危險地帶と稱せられ、其禍亂動もすれば歐洲一般に波及し、列强政治家の神經を惱ましたること一再に止まらず。古來此地に起れる戰爭にして歐洲六列强の參加せざる事殆ど無し。是蓋し歐洲勢力の均衡を持せんが爲のみに非ずして、直接間接に自家の安危消長に關するに由る。特に汎スラーヴ主義の露國竝に其餘國と汎日耳曼主義の獨墺兩國とに取りては國家の存在上重大なる意義を有するが爲也。現に今回の世界大戰亂も、其導火線の此半島に在りたる事實に徵して益明瞭ならずや。

此巴爾幹半島を種々の方面より觀察するは最も興味深き事なるにも拘らず、從來此地に關する著書は單に東歐問題に關する者のみに限られ、其最も曲折波瀾に富める變遷を詳述して史的智識を與ふるものに至りては我國には絕無なりき。著者兩先生深く之を遺憾とせられ、數年の星霜を費やして本書を公にせらる。凡そ文明人士に取りて史的智識の興味あり必要なるは固よりなれども、今日此際何人も讀んで知見を開き、快哉を呼ぶの本書の右に出づるものはあらじ。

3/1

355
1

終